

# IRISPowerScan 10.5

## 方法ガイド

v1.1

IPS10.5\_sjo\_20180115

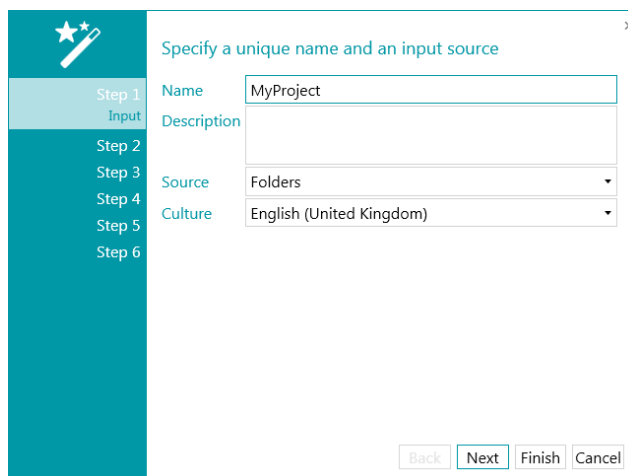
## 目次

プロジェクトの作成方法	4
画像サンプルを追加する方法	4
画像処理の使用方法	4
データ抽出の使用方法	5
空白画像の削除方法	6
ページの識別方法	7
Fingerprint	8
ドキュメントの分割方法	9
バッチの分割方法	9
インデックスの作成方法	11
マッチ演算子	12
出力の定義方法	12
スクリプトの使用方法	12
スクリプトを使用して添字フィールドの内容を Indexes.xml 出力ファイルに追加する方法	13
データソースの使用方法	14
従属	16
相互リンクされた添字フィールドの使用方法	17
フィールドが変更された場合に、バッチまたはドキュメントの名前を自動的に変更する方法	21
監視フォルダの使用方法	21
信号	22
バックグラウンド処理の実行方法	23
プロジェクトの共有方法	25
IRIS Powerscan 10.4およびそれ以前のバージョンのログの使用方法	26
IRIS Powerscan 10	26
IRIS Connect	27
IRIS Powerscan 10.5のログの使用方法	27
XMail Fetcher を IRIS Powerscan と併用する方法	29
XMail Fetcher のインストールと設定	29
IRIS Powerscan 内の設定	31
スキャン	32
QRコードを解読する方法	33
アンカー一点の検出の使用方法	36

厳密に言うと、アンカーポイントとは？	36
アンカー一点の検出がどのように機能するかの例	37
IRIS Powerscan でアンカーポイントを作成する方法	38
画像処理の要件	38
推奨される配置	38
IRIS Powerscan でアンカーポイントを作成する	39
処理中に何が起きているか？	40
チェックマーク検出の使用方法	41
IRIS Powerscan でチェックマークゾーンを作成する	41
チェックマークゾーンの値を基にインデックスフィールドに書き込む	42
Debookletting の使用方法	45
自動並び替え	45
手動並び替え	46
OCR 準拠の並び替え	47
インデックフィールドの正確度レベルを使用する	48
不明な変数を持つ表現式が処理されないようにする方法	49
IRIS Powerscan、使用している Windows システムアカウント、および Windows ユーザーアカウント間で日付の書式を同期する方法	49
リセットコードの取得方法	51
画像フィルタリングの適用方法	51

## プロジェクトの作成方法

プロジェクトを新規に作成するには、**ファイル** > **作成の順**にクリックし、テンプレート、この例では**ウィザード**をダブルクリックします。



Specify a unique name and an input source

Name	MyProject
Description	
Source	Folders
Culture	English (United Kingdom)

Back Next Finish Cancel

重複のないユニークな名前、さらに入力ソースとしては、**スキャナ**や**フォルダ**などを入力します。

最後に**完了**をクリックします（もし、他の設定を変更したい場合は、**次へ**をクリックします）。

## 画像サンプルを追加する方法

画像処理やデータ抽出操作を定義するには、**画像サンプル**が必要です。

ナビゲーションエクスプローラで画像を一つ選択し、**コピー**をクリックします。

**デザイナー** > **画像**にジャンプして、**貼り付け**をクリックします。

## 画像処理の使用方法

一つの画像処理操作を追加するには、一つの**画像サンプル**が必要です。

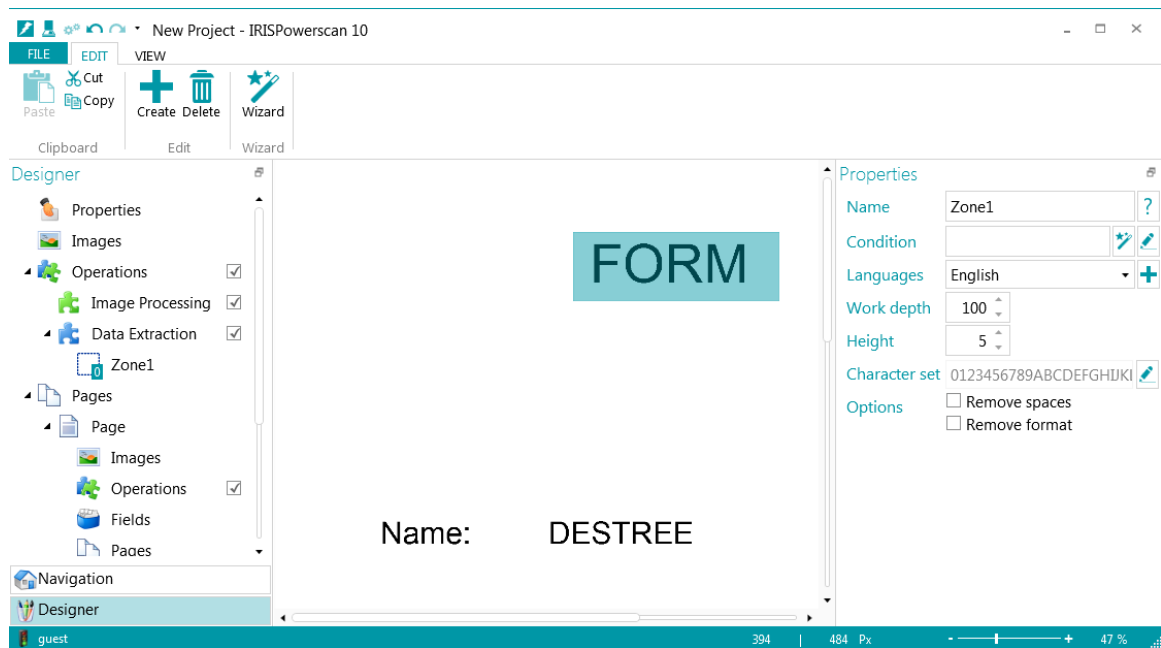
**デザイナー** > **操作** > **画像処理**にジャンプし、**作成**をクリックします。

**注記**： 殆どの場合、画像処理のオプションは、お使いのスキャナの設定で選択する方が、より高速です。

## データ抽出の使用法

一つのデータ抽出操作を定義するには、一つの[画像サンプル](#)が必要です。

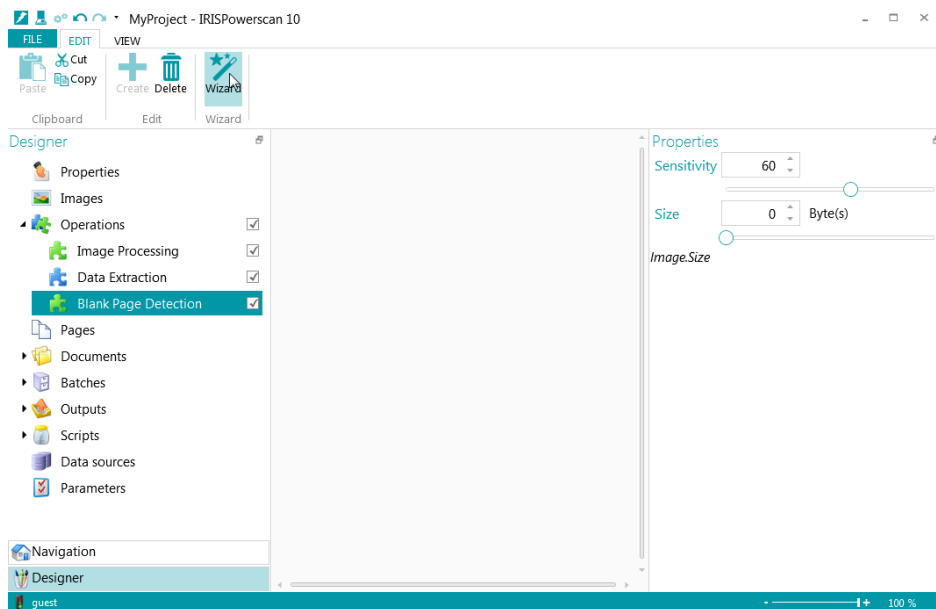
デザイナー > 操作 > データ抽出にジャンプし、ゾーンを描きます。



描いたゾーンの中のコンテンツ（この例では、FORM というテキスト）は、Image.Zone1 という変数の中に保存されます。

## 空白画像の削除方法

空白画像の削除は、スキャナレベルでこれに対応するオプション、即ち、お使いのスキャナの設定メニューの空白画像削除オプションを選択することを強くお勧めします。もし、お使いのスキャナの設定メニューにこのオプションがなければ、**デザイナー** > **操作**にジャンプします。**作成**をクリックして、**白紙ページの検出**を選択します。

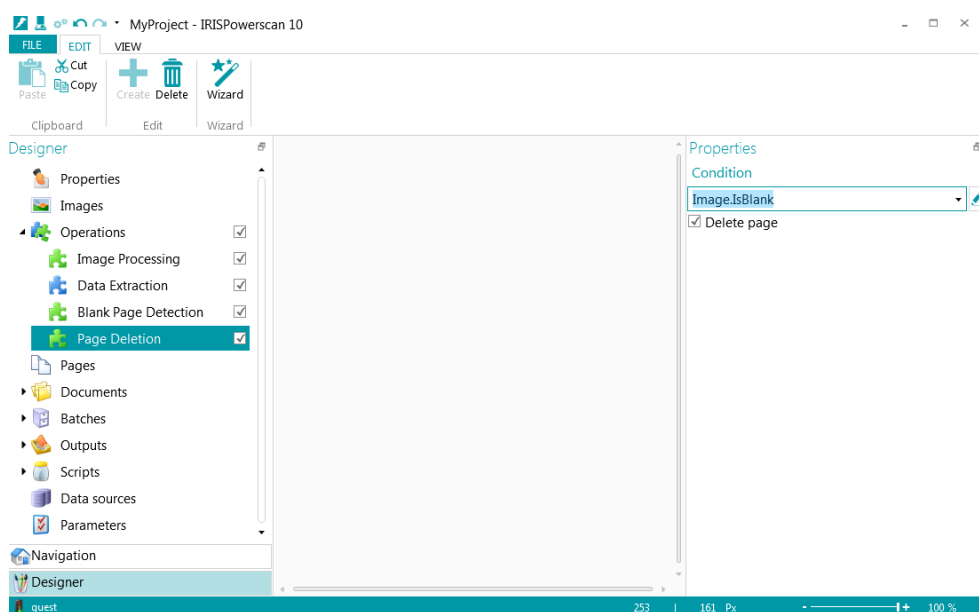


**感度**、または（圧縮されたバッファの）**サイズ**を、画像を空白と検出するようになるまで調整します。

変数、Image.IsBlank は、現在の画像が空白として検出された時、真となります。

変数、Page.IsBlank は、ページの表面と裏面の画像が共に白紙として検出された時、真となります。

空白画像を削除するには、**デザイナー** > **操作**にジャンプし、**作成**をクリックして、**白紙ページの検出**を選択します。次に、**操作** > **作成**をもう一度クリックし、**ページ削除**を選択して **Image.IsBlank**の条件を追加します。



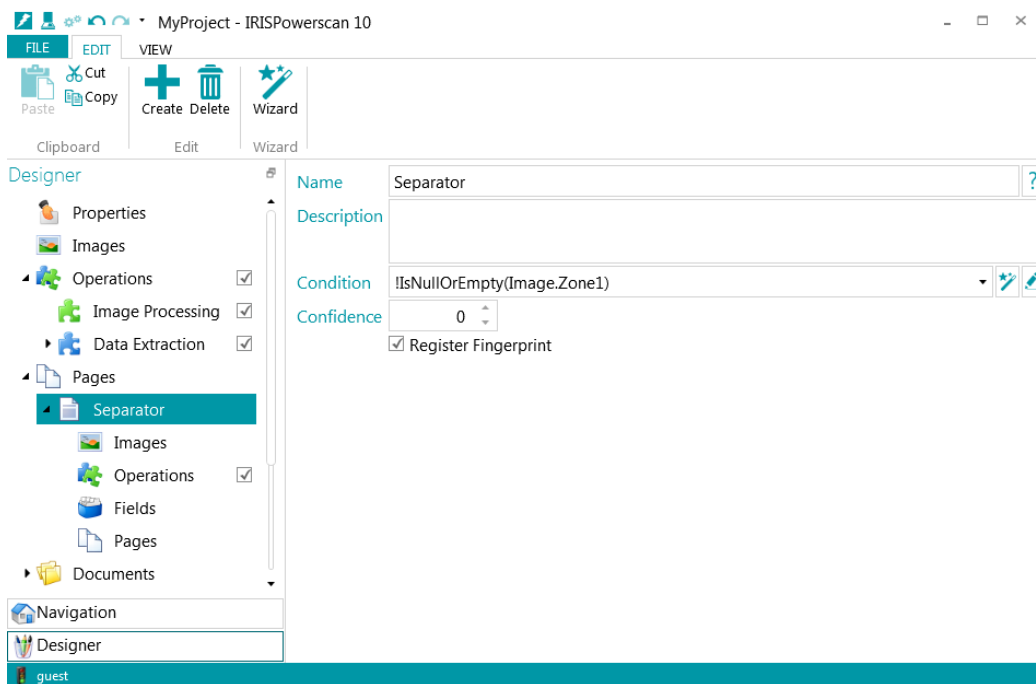
(例えば、Image.IsBlank の) 条件が真であれば、現在の画像が（空白として）検出されていることを示しています。

ページを削除するオプションを選択すると、ページの表面と裏面の両方の画像が削除されます。

## ページの識別方法

デザイナー > ページにジャンプして、作成をクリックし、識別したいページタイプの名前を入力して指定します。

指定したページタイプが識別されると、その条件が真となります。



上の例では、Zone1という値が空でなくなった時、あるページが区切りとして識別されたことを意味します。

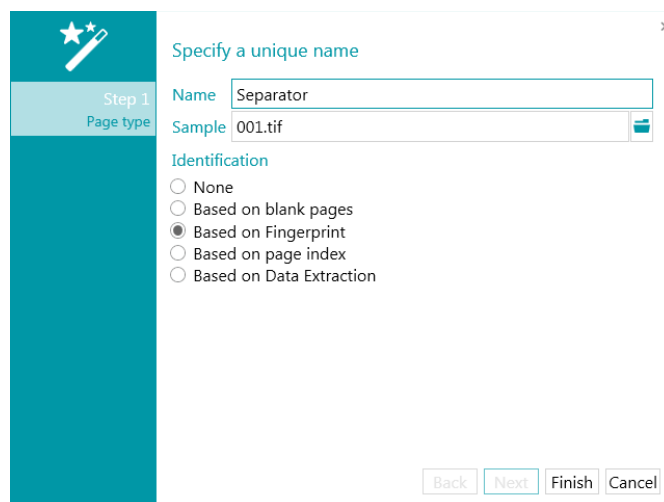
そして、そのページタイプ（この例では区切り）は、Page.Type という変数に保存されます。

デザイナー > ページ > 区切り > 操作にある操作は、「区切り」と呼ばれるページタイプに対してのみ適用されます。

## Fingerprint

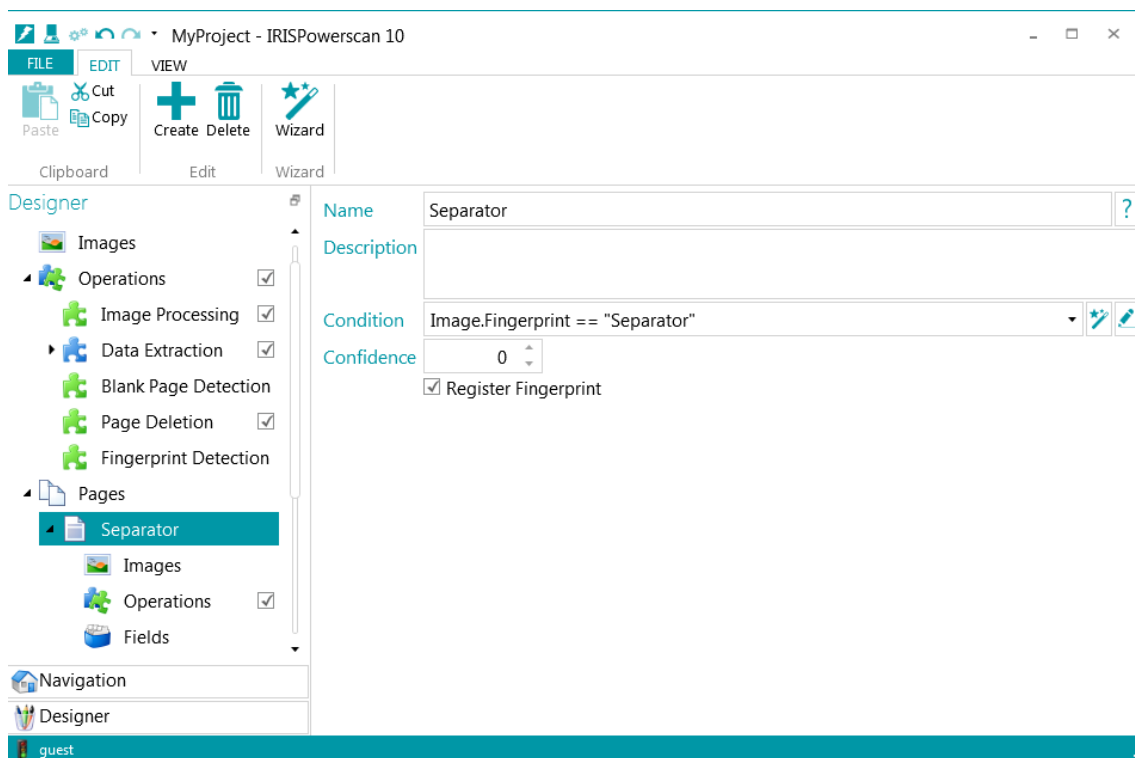
フィンガープリントの検出を有効にするには、デザイナー > 操作にジャンプして、作成をクリックし、フィンガープリントの検出を選びます。次に、デザイナー > ページにジャンプして、作成をクリックします。

新たに識別したいページタイプの名前を指定し、その識別方法を定義すると同時に、そのページタイプの画像サンプルを一つ提供します。



フィンガープリントの検出結果は、Image.Fingerprint という変数に保存されます。

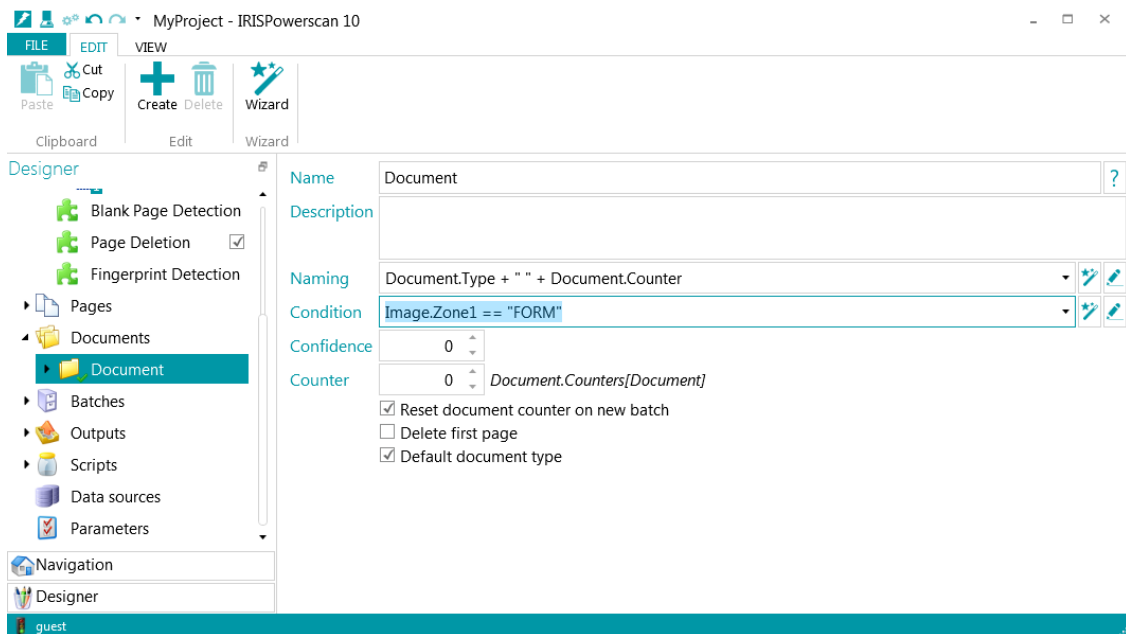
画像サンプルは、デザイナー > ページ > 区切り > 画像で追加できます。



## ドキュメントの分割方法

複数のページをドキュメントに区切るには、**デザイナー** > **ドキュメント** > **ドキュメント**にジャンプして、**条件**を指定します。この条件が真となった時、新しいドキュメントが生成されます。

新しく生成されたドキュメントの名前は、名前付け表現式で決まります。



例えば、(Zone1という) ゾーンの内容が「FORM」の時に、新しいドキュメントが生成されるとします。その新しいドキュメントの名前は、文書タイプ (Document.Type) の名前の後にドキュメントカウンター (Document.Counter) が続いたものとなります。

区切りが識別されるたびにドキュメントを作成するには、Page.Type == “Separator” という条件を使います。

入力ファイルごとにドキュメントを作成したい場合は、次の条件と名前付け表現式を使用します。

条件 : `Input.PageIndex == 1`

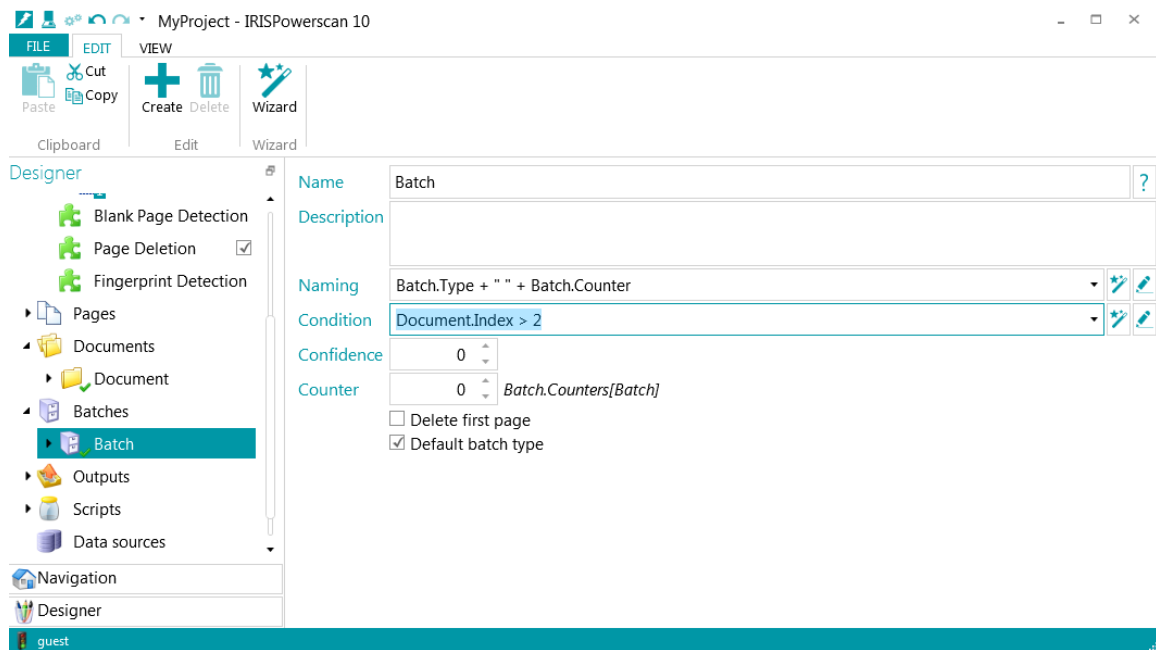
名前付け表現式 : `Filename(Input.Path)`

**注記** : スクリプト記述を使って、(Filename のような) 独自の機能を定義することができます。

## バッチの分割方法

複数のドキュメントをバッチとして区切るには、**デザイナー** > **バッチ** > **バッチ**にジャンプして、**条件**を指定します。この条件が真となった時、新しいバッチが生成されます。

新しく生成されたバッチの名前は、名前付け表現式で決まります。



例えば、3番目のドキュメントの時に、条件が真となり、新しいバッチが生成されるといった具合です。その新しいバッチの名前は、表現式により、バッチタイプ (Batch.Type) の名前の後にバッチカウンター (Batch.Counter) が続いたものとなります。

ヒント：キャプチャがサービスにより実行されている、即ち、監視フォルダを使用中の場合、バッチレベルで条件フィールドに条件「Input.PageIndex==1」を入力し、文書ごとに1つのバッチを監視フォルダに作成します。または、条件フィールドの隣にあるウィザードアイコンをクリックし、各ファイルでを選択します。

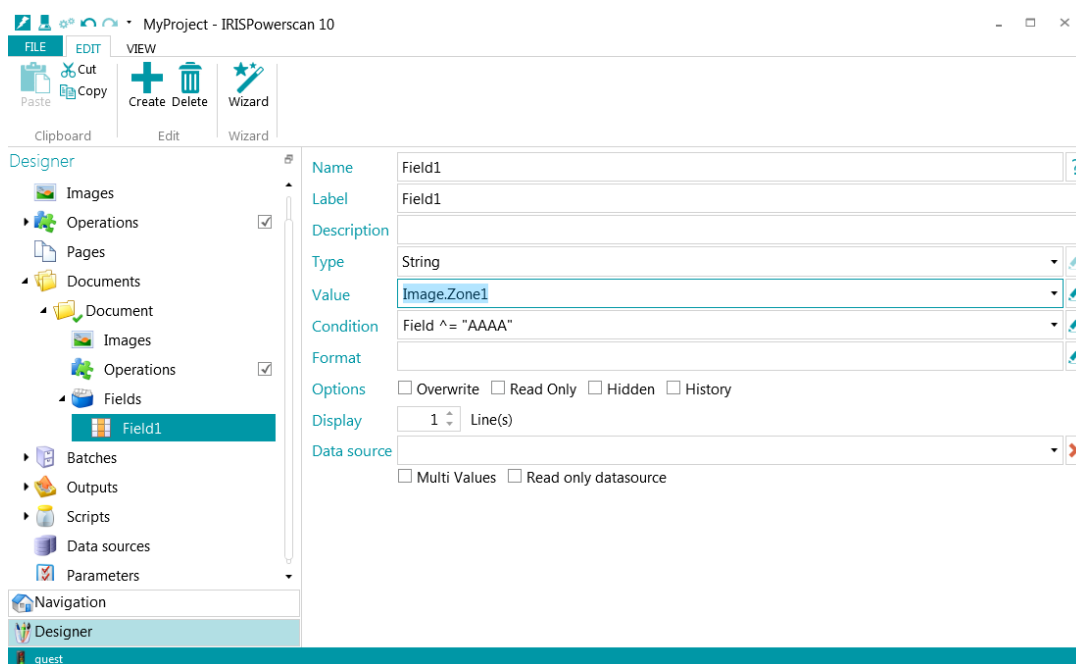
## インデックスの作成方法

バッチレベルで新規のインデックスフィールドを作成するには、**デザイナー > バッチ > バッチ > フィールド**へジャンプして、**作成**をクリックします。

ドキュメントレベルで新規のインデックスフィールドを作成するには、**デザイナー > ドキュメント > ドキュメント > フィールド**へジャンプして、**作成**をクリックします。

ユニークとなる名前、およびタイプと標準の値を入力します。

条件は、フィールドの有効性をチェックするのに使います。



例えば、Field1 の標準の値が、Zone1 の内容に設定されているとします。もし、Zone1 がちょうど四文字のコンテンツを持っていた場合、このフィールドは有効となります。

現在選択されているフィールドの値は、変数のフィールドに保存されます。

バッチレベルのフィールドは、それぞれ <バッチタイプ>. <フィールド名> の変数内に保存されます。

ドキュメントレベルのフィールドは、それぞれ <文書タイプ>. <フィールド名> の変数内に保存されます。

例えば、Batch.Field1 や Document.Field1 といった変数です。

## マッチ演算子

マッチ演算子 (^=) は、単純化された表現式、または正規表現式のチェックに使用します。

	単純化された表現式	正規表現式
1 文字	A	¥w
0 文字から 3 文字まで	A(3)	¥w{0, 3}
1 文字から 3 文字まで	A[3]	¥w{1, 3}
1 桁数字	9	¥d
あらゆる文字・数字	X	.

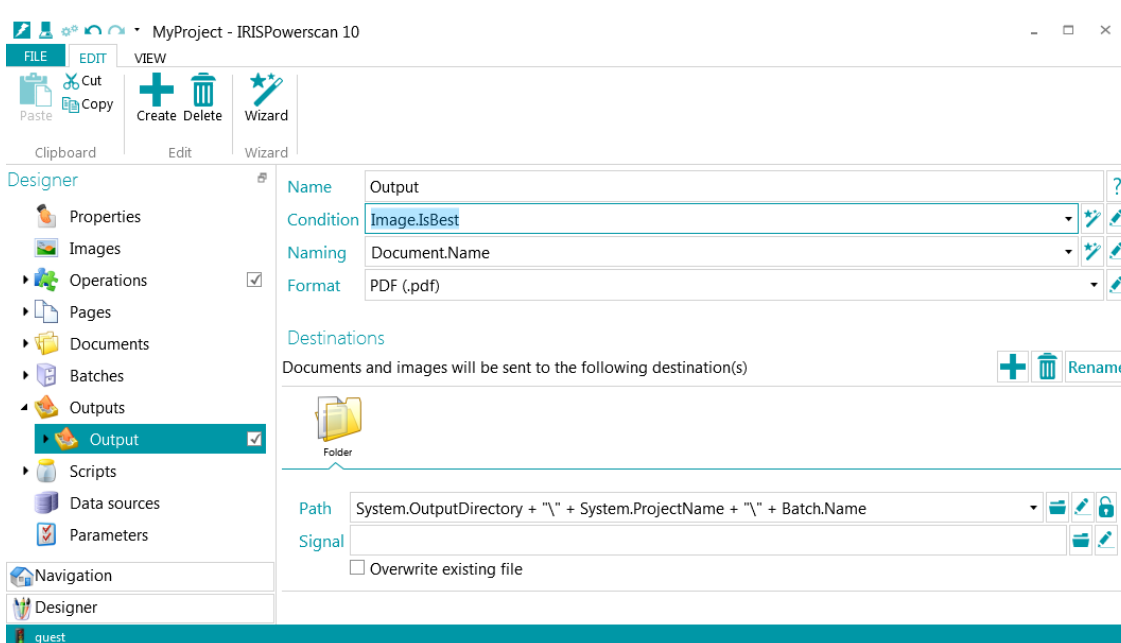
リテラル値は、一重引用符で囲まれます。

論理演算子、または (|) も使用できます。

例えば、Field ^= “AAAA|9999” という表現式は、フィールドがちょうど 4 文字、または 4 桁数字であることを表しています。

## 出力の定義方法

出力を定義するには、**デザイナー > 出力 > 出力へジャンプし、出力フォーマット、名前付け表現式、および単一または複数の出力先を指定します。**



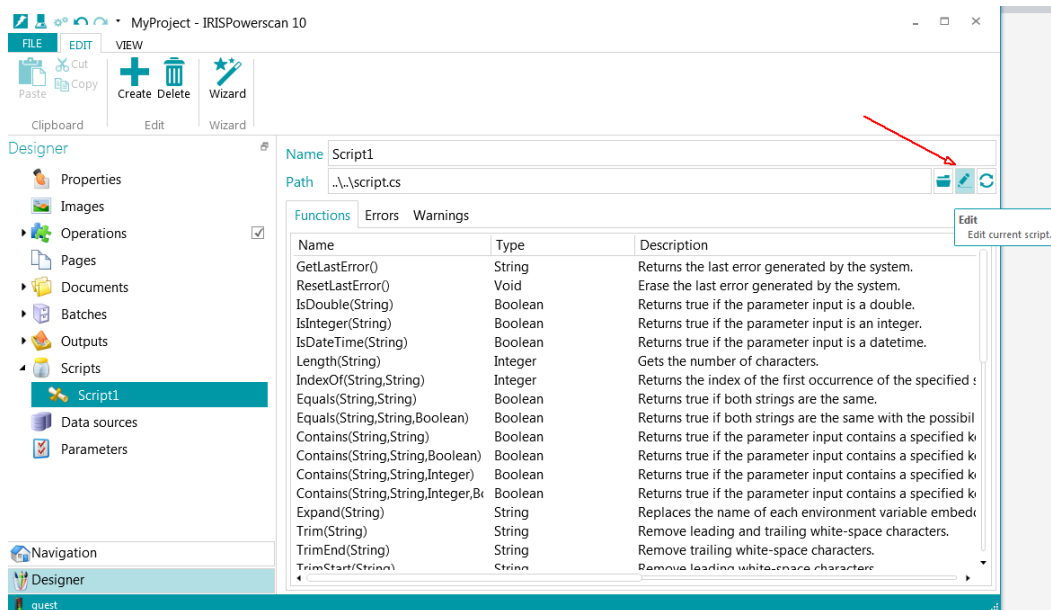
画像は、その出力条件が真となった時にエクスポートされます。

例えば、カラー画像だけをエクスポートする場合、Image.IsColor という条件を使います。

最良の画像（一画素あたりのビット数に関して）だけをエクスポートしたい場合、Image.IsBest という条件を使います。

## スクリプトの使用方法

独自の関数を追加するには、**デザイナー > スクリプト > スクリプトにジャンプして、編集**をクリックします。



標準設定では、**script.cs** (%Appdata%\IPSx¥script.cs) というファイルが、すべてのプロジェクトで共有されています。

独自にスクリプトを作成する場合、そのスクリプトのファイルをプロジェクトフォルダ（例えば、%Appdata%\IPSx¥Projects¥MyProject）内に保存することを強く推奨します。

## スクリプトを使用して添字フィールドの内容を Indexes.xml 出力ファイルに追加する方法

プロジェクトによっては、添字フィールドの内容を Indexes.xml 出力ファイルに保存する必要があります。

例：

IRIS Powerscan はクライアント・サーバーモードで使用され、着信メールをスキャンして添字を付けます。すべてのメールが1台の IRIS Powerscan ワークステーションでスキャンされます。メールごとに1つのバッチとなります。スキャンが完了すると、別の IRIS Powerscan ワークステーションが、IRIS Powerscan Server からすべてのバッチをダウンロードし、添字を検証します。添字の検証が完了すると、これらのバッチは IRIS Powerscan Server に戻されて処理されます。

インデクサーの名前が Indexes.xml 出力ファイルに保存されることを、スクリプトスクリプトを使用して確認します。この処理は、OnDownload イベントを作成して行います。インデクサーが添字を検証するためのバッチをダウンロードすると、必要な内容がすぐに Indexes.xml 出力ファイルに挿入されます。

設定：

- 1 台の IPS ワークステーションがバッチをスキャンし、別の 1 台の IPS ワークステーションが添字を検証するクライアント・サーバーアーキテクチャを設定します。
- 標準文書タイプで、「インデクサー」添字フィールドを作成し、それを抽出ゾーンとリンクさせます。次に、条件フィールドに **!IsNullOrEmpty(Field)** と入力します。

- ドキュメントのエクスポート先の出カタイプを追加します。  
続けて別の出カタイプを追加し、**Indexes.xml** を書式に選択します。このファイルにはインデクサー名が含まれます。
- 以下の内容を含むスクリプトを記述します。

```
using System;
using System.ComponentModel;
using IPSx.Api;

namespace IPSx.Scripting
{
    public partial class Script : IEventListener
    {
        public bool OnEvent(string name, object parameter)
        {
            if (!string.Equals(name, "OnDownload", StringComparison.InvariantCultureIgnoreCase)) return false;

            IPSxNode ipsxNode = parameter as IPSxNode;
            if (ipsxNode == null) return false;

            string currentUser = string.Empty;
            foreach (IPSxField ipsxField in ipsxNode.Fields)
            {
                if (string.Equals(ipsxField.Label, "CurrentUser", StringComparison.InvariantCultureIgnoreCase))
                {
                    currentUser = (string) ipsxField.Value;
                    break;
                }
            }

            foreach (IPSxField ipsxField in ipsxNode.Fields)
            {
                if (string.Equals(ipsxField.Label, "IndexerWindows", StringComparison.InvariantCultureIgnoreCase))
                    ipsxField.Value = Environment.UserName;
                if (string.Equals(ipsxField.Label, "IndexerIPSx", StringComparison.InvariantCultureIgnoreCase))
                    ipsxField.Value = currentUser;
            }
            return true;
        }
    }
}
```

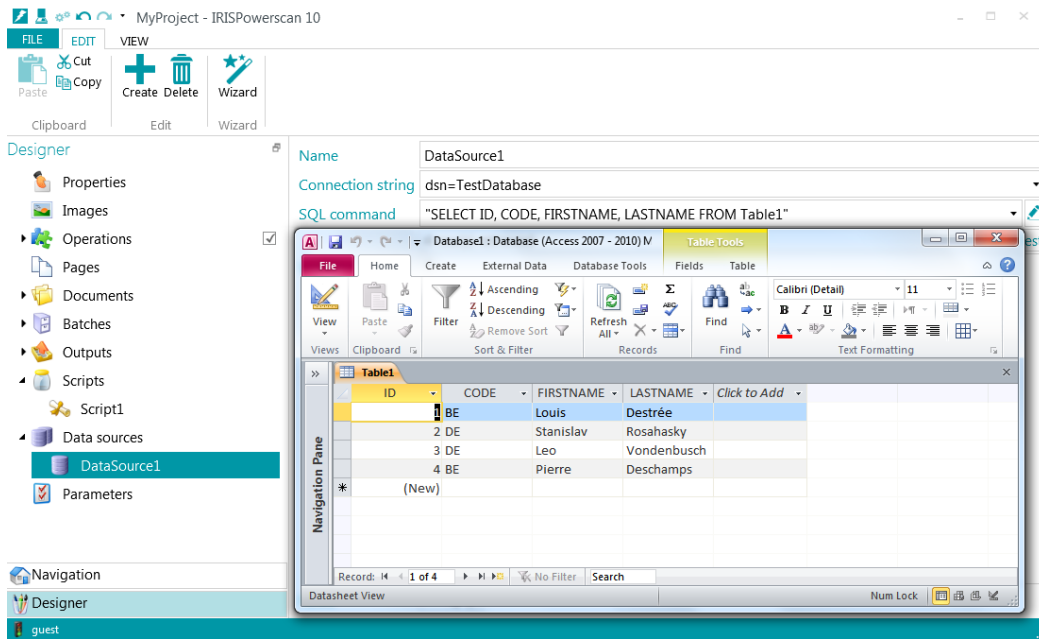
- 作成したスクリプトを IRIS Powerscan プロジェクトに追加します。
- ドキュメントをスキャンして添字を付けます。
- 出力フォルダにジャンプし、**Indexes.xml** ファイルを開いて、インデクサー名が含まれているかどうかを確認します。

## データソースの使用方法

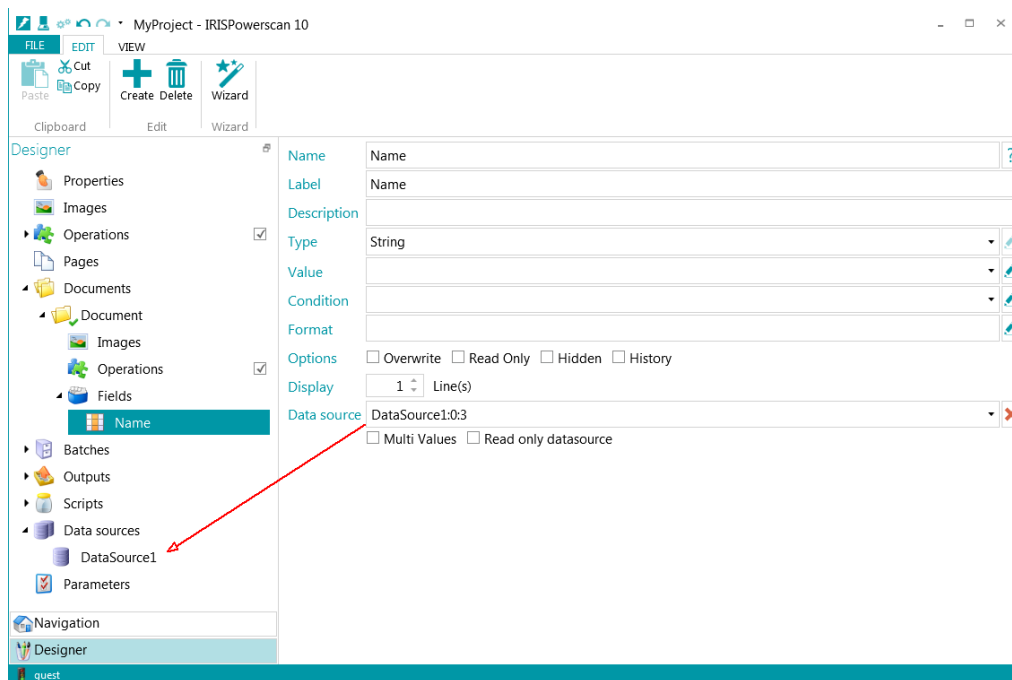
ODBC データソースを作成するには、**デザイナー** > **データソース**にジャンプして、**作成**をクリックします。

ODBC をソースとして選択します。

次に、DSN **接続文字列**と **SQL コマンド**を指定します。



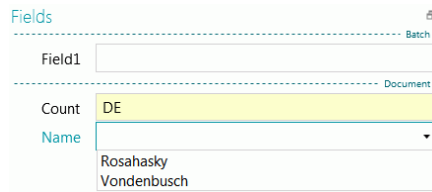
データソース (DataSource) にリンクするインデックスフィールドを作成します。



DataSource1:0:3 は、第1列 (ID) の値が、(Document. Name に) 保存され、そして第4列 (LASTNAME) の値が、表示されることを示しています。

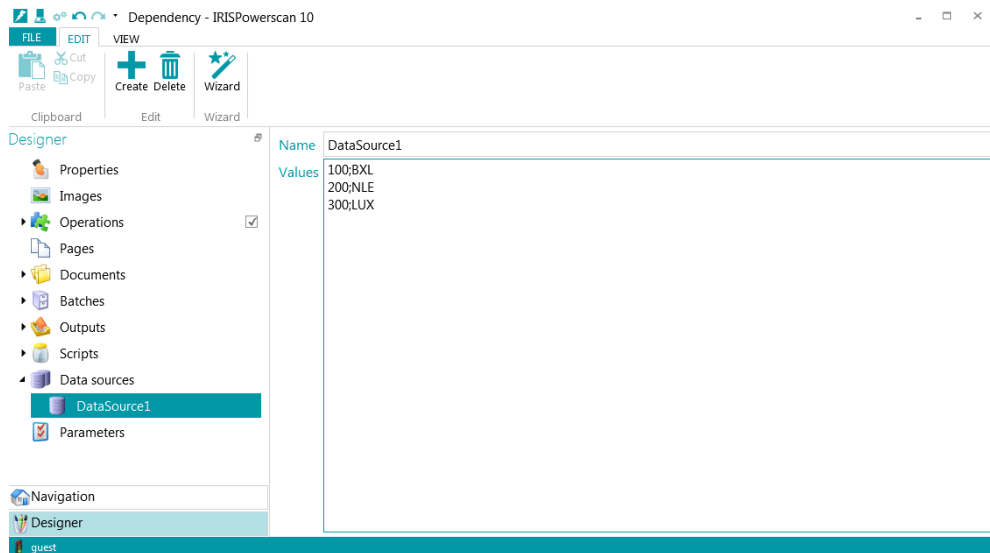
さらに絞り込んだ検索を行うために、(例えば、国名のような) もう一つのインデックスフィールドを作成し、SQL コマンドを次のように変更します。

```
"SELECT ID, CODE, FIRSTNAME, LASTNAME FROM Table1 WHERE CODE = '" + Document.Count ry + "'"
```

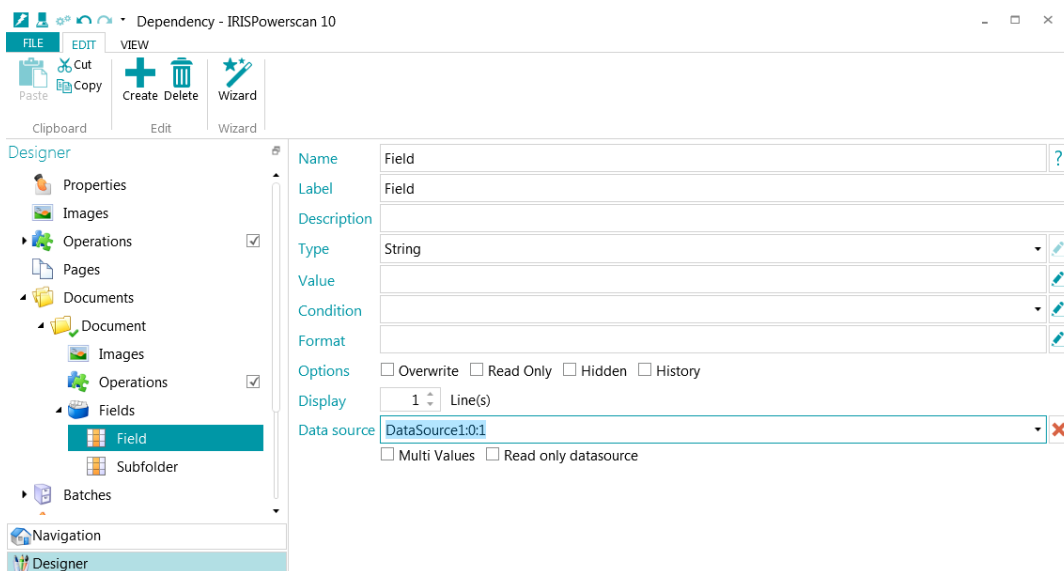


## 従属

デザイナー > データソースにジャンプして、一覧形式で、二つの列を持つデータソースを作成します。



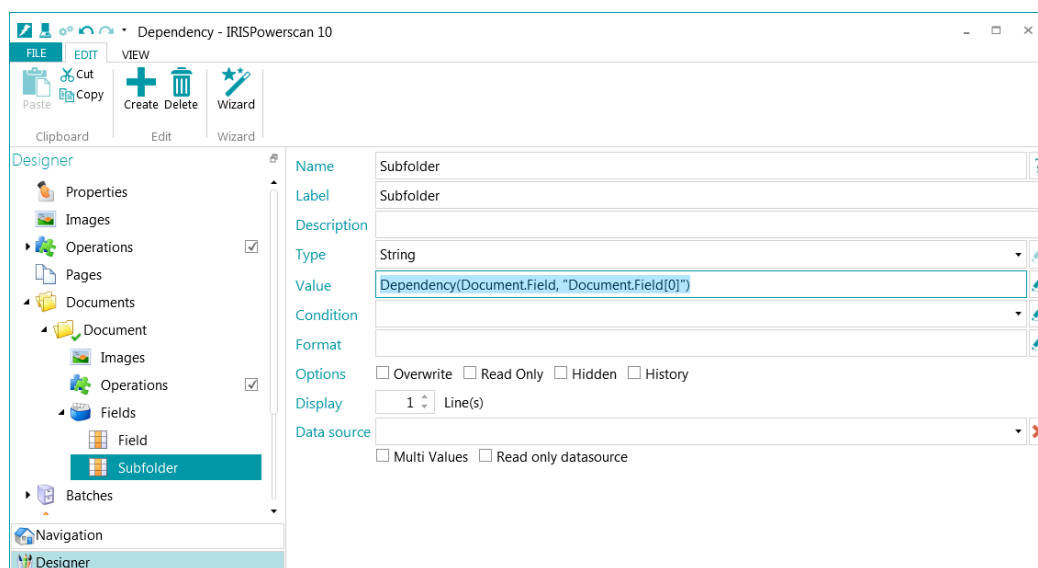
作成したデータソースをフィールドの一つ（例えばフィールド）にリンクさせます。



DataSource1:0:1 には、次のような意味があります。

- 最初の列（添字 = 0）の値は、保存用である。
- 第二列（添字 = 1）の値は、表示用である。

次に、別のフィールド（例えば、SubFolder）を定義します。



SubFolder は、Document.Field に従属します。Document.Field が変更されると、Document.Field の第一列により SubFolder の値は更新されます。

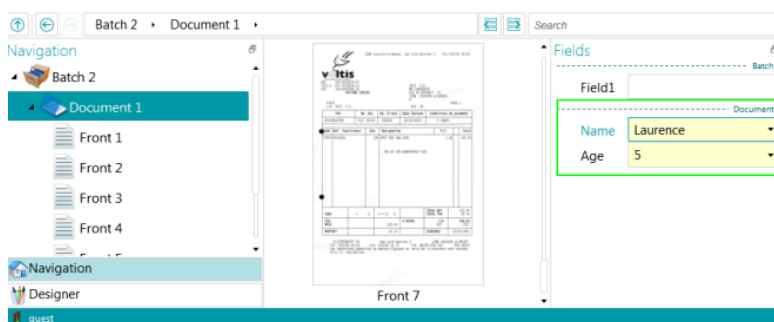
## 相互リンクされた添字フィールドの使用法

このセクションでは、相互リンクされた添字フィールドを、ODBC データソースを用いて使用する方法を説明します。

本書の例では、人と年齢の一覧を含む Excel ファイルを作成しました。

	A	B
1	Name	Age
2	Laurence	5
3	Martine	10
4	Harold	15
5	Eliott	20
6	Albert	25
7	Tom	30
8	Paul	35
9	Tony	40
10	Vicki	45

IRIS Powerscan に、名前および年齢と呼ばれる2つの添字フィールドを作成し、これらのフィールドを ODBC データソースにリンクさせます。これらの値フィールドに値を入力することにより、名前が選択された場合には対応する年齢が、その逆の場合も同様に対応する値が表示されるようになります。



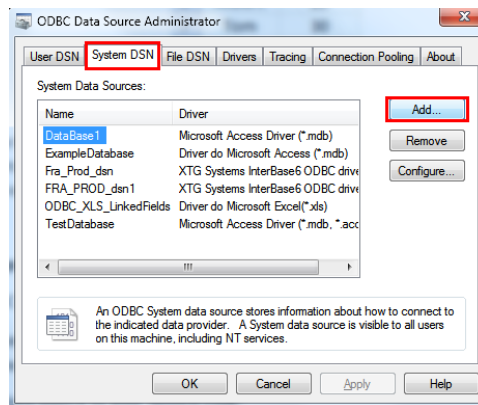
## 事前のステップ

ODBC データソースを作成する：

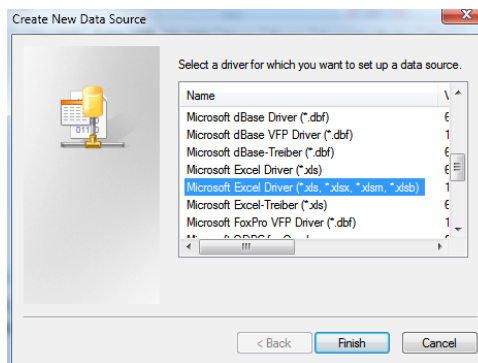
- Excel ファイルを作成し、LinkedFields.xlsx という名前を付けます。
- 上述のように、値を入力します。

ODBC データソースをシステムDSNに追加する：

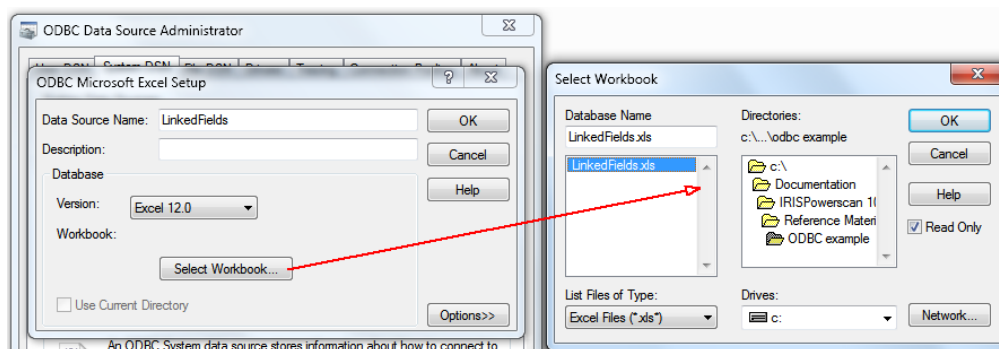
- コントロールパネル > 管理ツール > データソース (ODBC) にジャンプします。  
重要： 64ビットのオペレーティングシステムを使用している場合、データソース (ODBC) は、C:\Windows\SysWOW64\odbcad32.exeから開始します。
- システムDSNタブをクリックし、続いて追加をクリックします。



- Microsoft Excel ドライバ (\*.xls、\*.xlsx、\*.xlsm、\*.xlsb) を選択し、完了をクリックします。

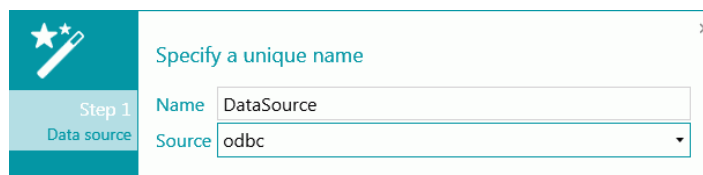


- データソース名を入力します。例：LinkedFields
- ワークブックを選択をクリックし、作成した Excel ファイルを参照します。
- OK をクリックして、設定内容を確認します。



## 相互リンクされたフィールドを IRIS Powerscan に作成する

- デザイナー > データソースにジャンプします。
- 作成をクリックします。
- データソースに **DataSource** という名前を付け、ソースに **ODBC** を選択して、次へをクリックします。



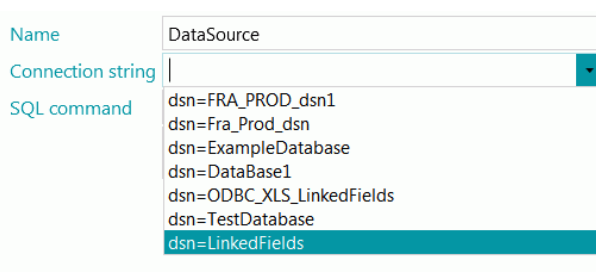
Specify a unique name

Step 1  
Data source

Name DataSource

Source odbc

- 接続文字列リストで、正しいデータベースを選択します。本書の例では、**dsn=LinkedFields** となっています。



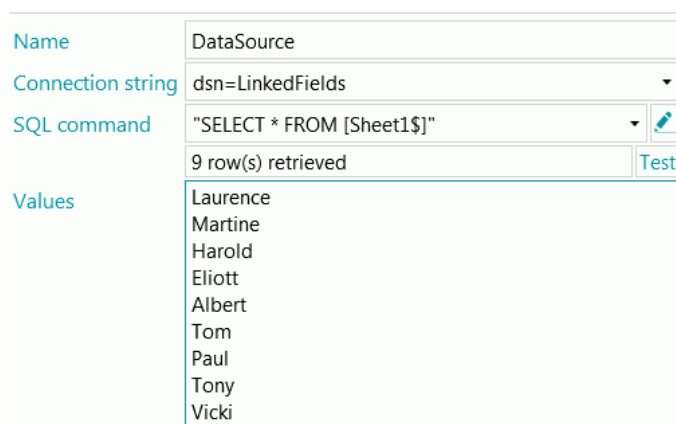
Name DataSource

Connection string

SQL command

- dsn=FRA\_PROD\_dsn1
- dsn=Fra\_Prod\_dsn
- dsn=ExampleDatabase
- dsn=DataBase1
- dsn=ODBC\_XLS\_LinkedFields
- dsn=TestDatabase
- dsn=LinkedFields

- 次に、SQL コマンド、**"SELECT \* FROM [Sheet1\$]"** を入力します。
- テストをクリックして、正常に動作するか確認します。  
以下に示す結果が得られます。



Name DataSource

Connection string dsn=LinkedFields

SQL command "SELECT \* FROM [Sheet1\$]"

9 row(s) retrieved Test

Values

- Laurence
- Martine
- Harold
- Eliott
- Albert
- Tom
- Paul
- Tony
- Vicki

- 次に、標準文書タイプに2つの添字フィールドを作成します。
- 最初のフィールドに **名前** という名前を付けます。
- データソースフィールドの隣にある下向き矢印をクリックして、作成したデータソースを選択します。  
本書の例では、**DataSource** となっています。
- データソース名の後ろに **「:0」** と入力して、**DataSource:0** とします。  
ここで、:0 は、データソースの第1列を意味します。本書の例では **名前** リストを指します。

	0	1
	A	B
1	Name	Age
2	Laurence	5
3	Martine	10
4	Harold	15
5	Elliott	20
6	Albert	25
7	Tom	30
8	Paul	35
9	Tony	40
10	Vicki	45

- 値フィールドに、**\$(Document. Age, 0)** と入力します。

The screenshot shows the 'Designer' window with a tree view on the left containing 'Name' and 'Age' fields. The right pane shows the configuration for the 'Name' field:

- Name: Name
- Label: Name
- Description:
- Type: String
- Value: \$(Document.Age,0)
- Condition:
- Format:
- Options:  Overwrite  Read Only  Hidden  History
- Display: 1 Line(s)
- Data source: DataSource:0
- Multi Values  Read only datasource

- 2つめの添字フィールドを作成し、**年齢**という名前を付けます。
- データソースフィールドの隣にある下向き矢印をクリックして、作成したデータソースを選択します。  
本書の例では、**DataSource** となっています。
- データソース名の後ろに「:1」 と入力して、**DataSource:1** とします。  
ここで、:1 は、データソースの第2列を意味します。本書の例では年齢リストを指します。
- 値フィールドに、**\$(Document. Name, 1)** を入力します。

The screenshot shows the 'Designer' window with a tree view on the left containing 'Name' and 'Age' fields. The right pane shows the configuration for the 'Age' field:

- Label: Age
- Description:
- Type: String
- Value: \$(Document.Name,1)
- Condition:
- Format:
- Options:  Overwrite  Read Only  Hidden  History
- Display: 1 Line(s)
- Data source: DataSource:1
- Multi Values  Read only datasource

## 結果をテストする

- ナビゲーションモードに切り替えて、複数のドキュメントをスキャンします。
- 名前フィールドで名前を選択します。  
対応する年齢が表示されます。
- または、年齢フィールドで年齢を選択します。  
この場合は、対応する名前が表示されます。

The screenshot shows the 'Fields' window with two sections: 'Batch 2' and 'Document 1'. Under 'Document 1', the 'Name' field is set to 'Laurence' and the 'Age' field is set to '5'.

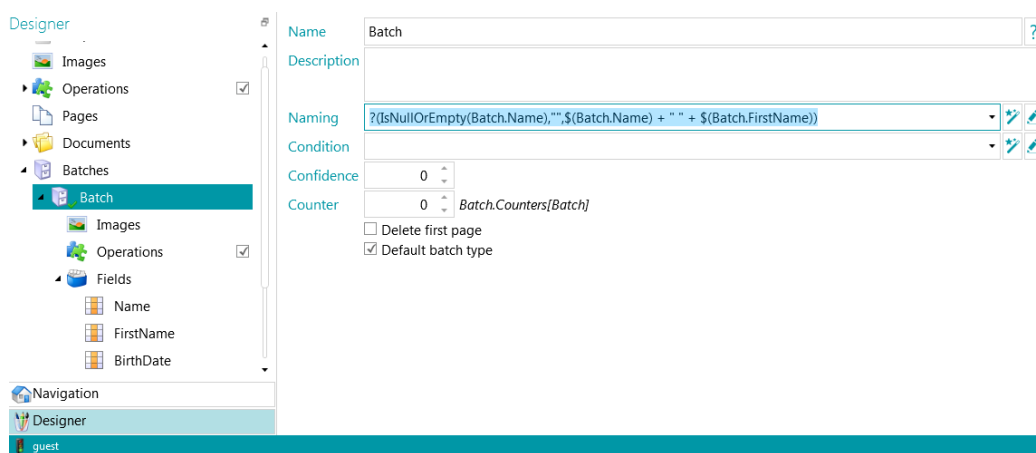
## フィールドが変更された場合に、バッチまたはドキュメントの名前を自動的に変更する方法

バッチやドキュメントのフィールドが変更された場合に、そのフィールドの名前を自動的に変更するには、\$( ) 依存機能を使用します。

例 : `? (IsNullOrEmpty (Batch. Name), "", $(Batch. Name) + " " + $(Batch. FirstName))`

これは、この名前付けの式が、**Batch. Name**および**Batch. FirstName**の2つのフィールドに依存することを意味します。言い換えれば、**Batch. Name**または**Batch. FirstName**が手動で変更された直後に、名前付けの式は再評価される必要があるということです。

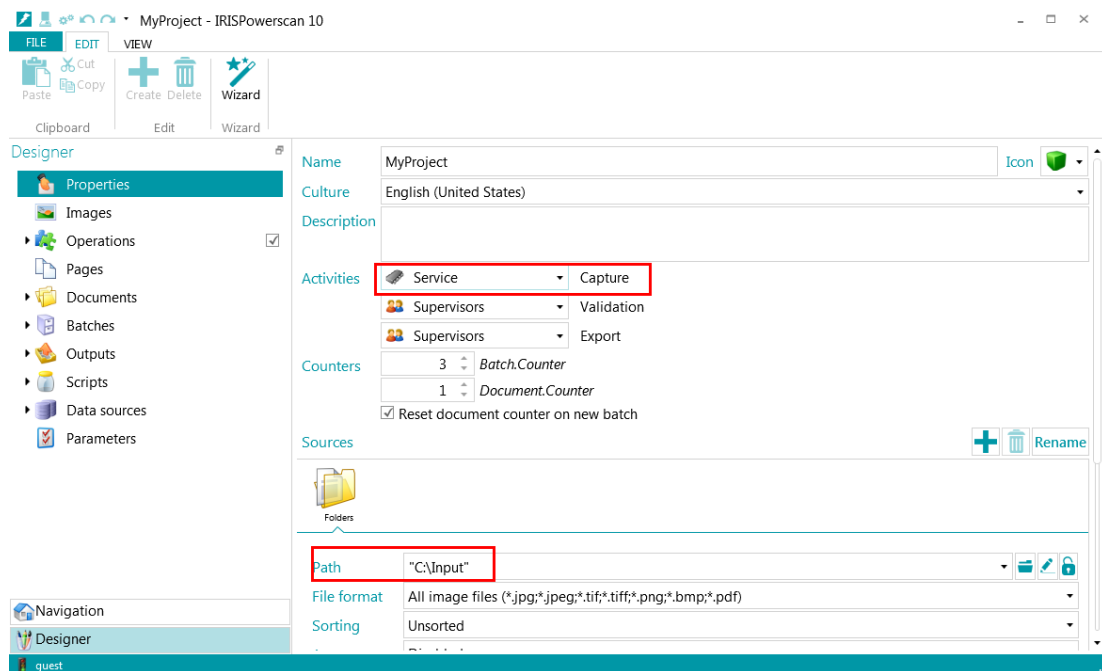
**注記** : 名前付けの式は、**Batch. Name**フィールドがNull でも空白でもない場合にのみ評価されます。このフィールドがNull または空白の場合、標準のバッチまたはドキュメントの名前が使用されます。



## 監視フォルダの使用方法

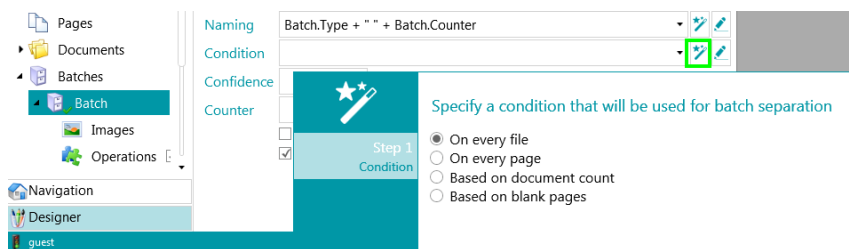
監視フォルダを定義するには、**デザイナー** > **プロパティ**にジャンプして、入力フォルダ（例えば、CC:¥input）を指定し、**キャプチャのアクティビティをサービスに割り当てます**。

**注記** : サービス経由でキャプチャを実行する場合、アドオンは必要ありません。エクスポートが、サービスによって実行される場合にのみ、**Background Processing add-on** が必要です。



ナビゲーションモードで、開くをクリックし、サービスが取り込んだバッチの検証を行います。

**注記：** 監視フォルダと連携している場合に、入力ファイルごとに1つの出力ファイルを作成するには、バッチレベルで条件フィールドの隣にあるウィザードアイコンをクリックし、各ファイルでを選択します。

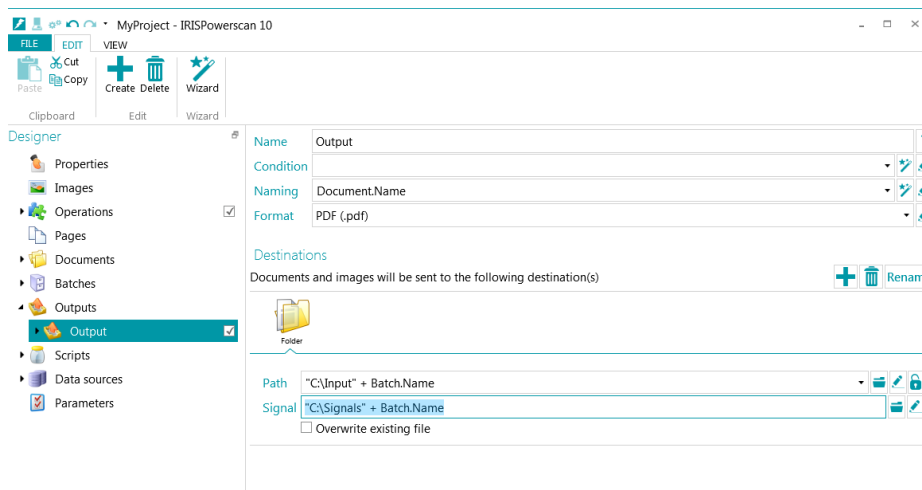


この処理を行わないと、ファイルは結合されます。例：5つのPDFファイルがそれぞれ2ページの場合、10ページの1つのPDFファイルになります。

## 信号

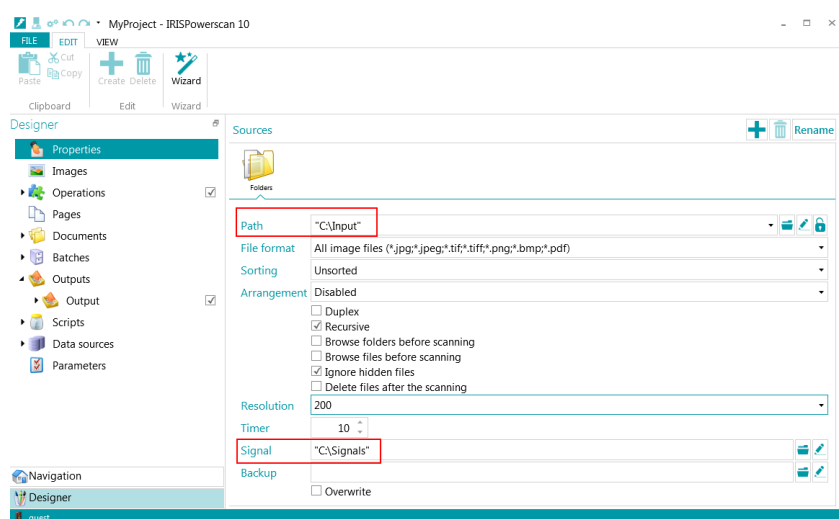
信号は、あるプロジェクトでスキャンされた後、別のプロジェクトの監視フォルダにエクスポートされたドキュメントのインポートとエクスポートを保証するために使用します。

新しいプロジェクトを作成し、出力と信号のパスを定義します。



すべてのPDFドキュメントがエクスポートされた時、一つの信号ファイルが、C:\signals のフォルダの中に生成されます。

次に、もう一つのプロジェクトを作成し、監視フォルダを定義します。

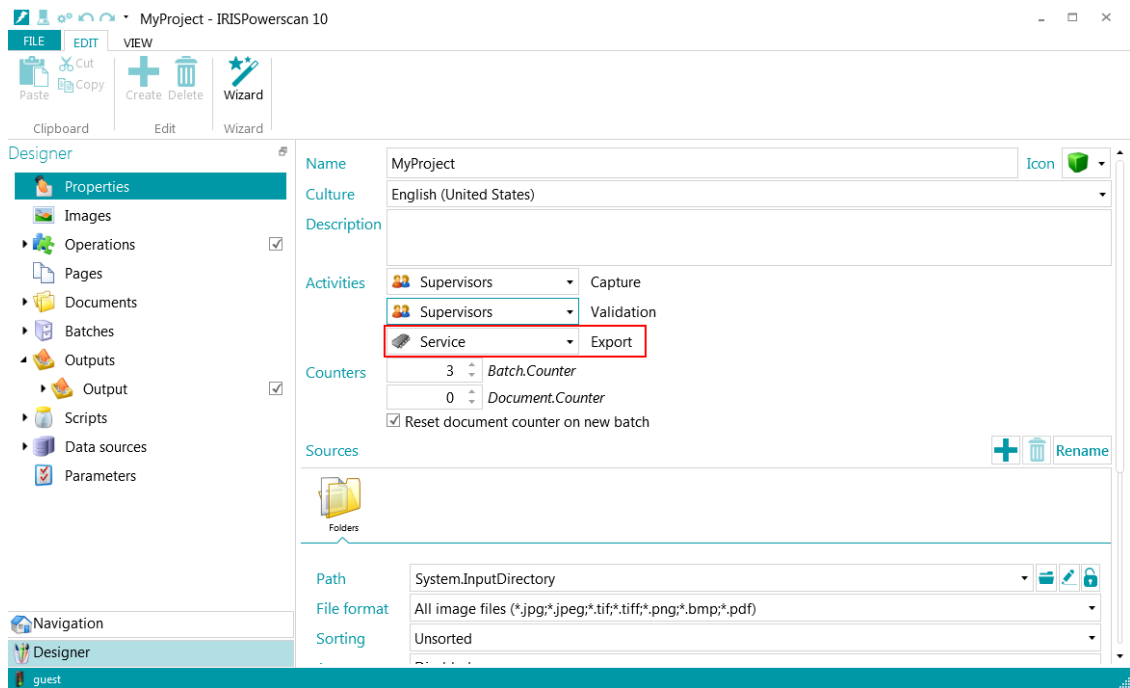


監視フォルダ (C:\input) のサブフォルダ (例えば、Batch 1) は、信号フォルダ (C:\Signals) 内にサブフォルダと同じ名前 (Batch 1) の信号ファイルが生成された時だけ、処理が加えられます。

## バックグラウンド処理の実行方法

バッチのエクスポートをバックグラウンドで行うには、**デザイナー > プロパティ**にジャンプして、エクスポートの処理をサービスに割り当てます。

**重要**：エクスポート処理をサービスに割り当てるには、**Background processing add-on**を取得し、アクティベーションする必要があります。



ナビゲーションペインで、プロセスをクリックし、エクスポートするバッチをサービスに送ります。

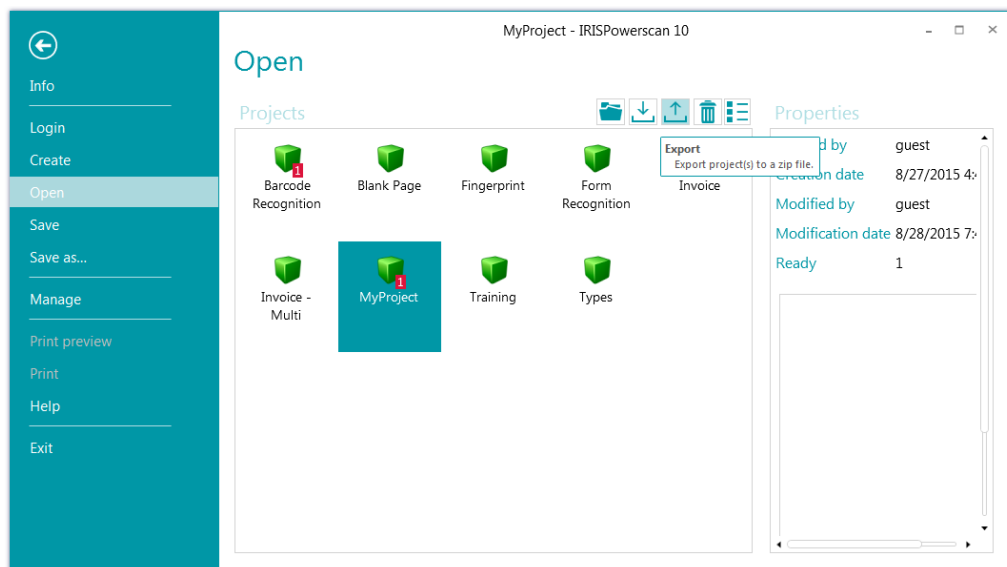
すべてのバッチのエクスポートの進捗状況を確認するには、ファイル > 管理と続けてクリックします。

## プロジェクトの共有方法

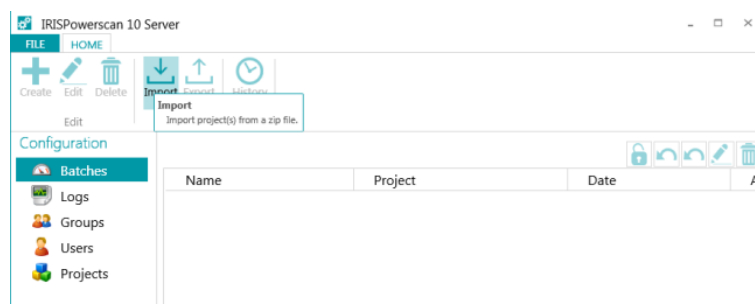
複数のワークステーション間でプロジェクトやバッチ、さらにはユーザーやグループを共有するには、**IPSxServer** をインストールします。

**注記：** 「標準の」 IPS 10 アクティベーション・コードが必要です。

ワークステーションから共有するプロジェクトをエクスポートします。

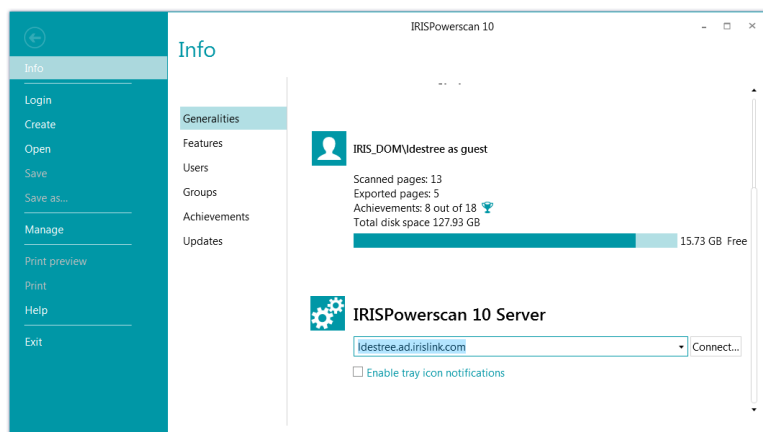


IRIS Powerscan Server にそのプロジェクトをインポートします。



**注記：** 共有しているプロジェクトを更新するには、IRIS Powerscan のワークステーションの一台から最新のプロジェクトをエクスポートし、IRIS Powerscan Server に再度インポートする必要があります。

各ワークステーションでは、**ファイル** > **情報** > **一般**から IRIS Powerscan Server に接続します。



**注記：** 各ワークステーションには、**Central Management add-on** が、アクティベーションされていなければなりません。

## IRIS Powerscan 10.4およびそれ以前のバージョンのログの使用 方法

ログを有効にできるのは、IRIS Powerscan のエキスパートに限定すべきです。

### IRIS Powerscan 10

C:\Program Files (x86)\IRIS Powerscan 10\IRIS Powerscan.exe.config with NotePad.exe を開きます。

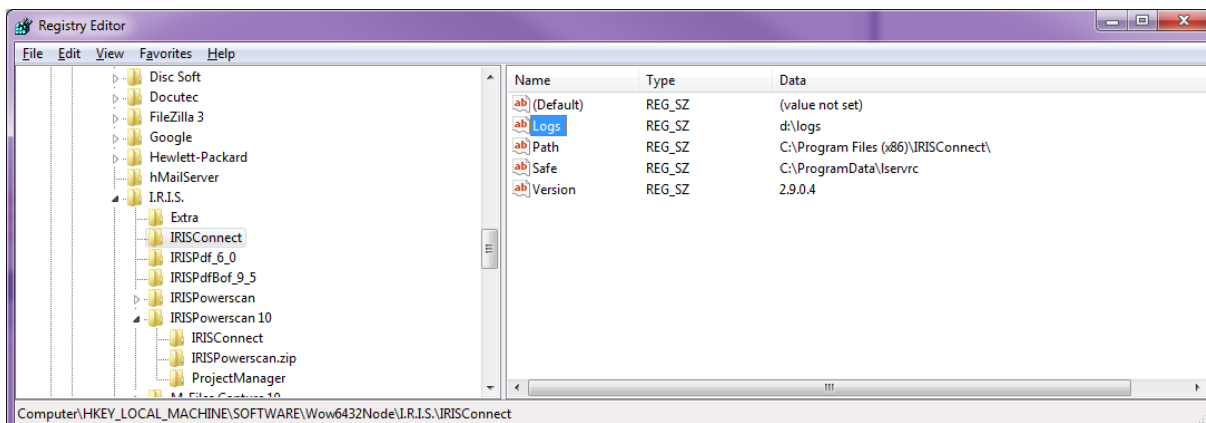
<system.diagnostics> ノードを以下のように編集します。

```
<system.diagnostics>
  <switches>
    <!-- TraceLevel defines the level of tracing
    "0" Off,
    "1" Error: gives only error messages,
    "2" Warning: gives errors and warnings,
    "3" Info: gives more detailed error information,
    "4" Verbose: gives verbose trace information -->
    <add name="TraceLevel" value="4"></add>
    <add name="SourceLevel" value="All"></add>
  </switches>
  <sharedListeners>
    <add name="Console" type="System.Diagnostics.ConsoleTraceListener" initializeData="true"/>
    <add name="LogFile" type="System.Diagnostics.TextWriterTraceListener" initializeData="c:\temp\IPSx.log"/>
    <add name="EventLog" type="System.Diagnostics.EventLogTraceListener" initializeData="I.R.I.S."/>
  </sharedListeners>
  <sources>
    <source name="IPSx" switchName="SourceSwitch" >
      <listeners>
        <add name="LogFile"/>
      </listeners>
    </source>
  <trace indentsize="4" autoflush="true" useGlobalLock="true">
    <listeners>
      <add name="Console"/>
      <add name="LogFile"/>
    </listeners>
  </trace>
</system.diagnostics>
```

## IRISConnect

レジストリ (regedit.exe) を開きます。

「Logs」と呼ばれる文字列の値を IRISConnect のレジストリキーに追加します。



IRISConnect のレジストリキーが存在しない場合、ご自身で作成してください。

## IRISPowerScan 10.5のログの使用方法

ログイン機能を見るには、**ファイル** > **情報** > **一般** > **報告**の順にクリックします。

詳細な報告が必要とされる場合、**アプリケーションのログイン**と**サービスのログイン**のドロップダウンリストにある**すべてのメッセージ**を選択します。

注記：サービスのログインドロップダウンリストで、すべてのメッセージを選択する際は、アプリケーションを再起動する必要があります。

再起動後、**診断データのエクスポート**ボタンを使用して、すべてのトレースをエクスポートおよび保存できます。

### Reporting

Enable tray icon notifications

Application logging All messages ▾

Service logging All messages ▾

Export diagnostic data

診断データをエクスポートするには、**診断データのエクスポート**ボタンをクリックして、エクスポートしたいデータを選択します。

- **プロジェクト**: プロジェクト設定をエクスポートします。
- **画像キャッシュ**: ビューアー内で表示可能な画像をエクスポートします。
- **拡張済みログ**: Windowsのイベントログをエクスポートします。  
ログは、C:\ProgramData\IPSx\LocalProjects\Logsに保管されます。

**注記：** 診断データのエクスポートをクリックした時点でプロジェクトが開かれていない場合、利用できるのは**拡張済みログオプション**のみです。

## Export diagnostic data

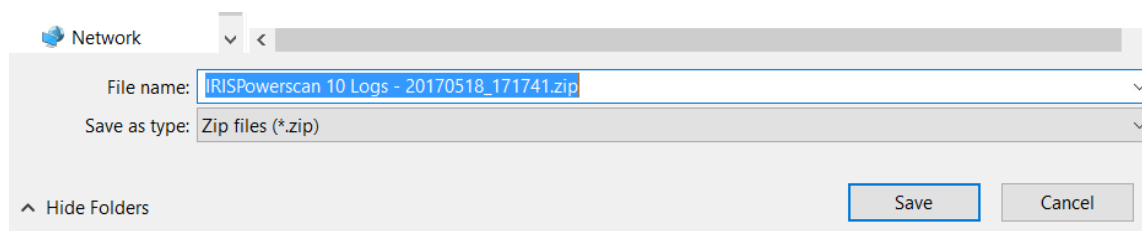
Export options

- Project
- Image cache
- Extended logs

OK

Cancel

- 完了したら、**OK**をクリックします。
- **エクスポート**ウィンドウが開きます。  
プロジェクトの名前を入力し、**保存**をクリックして、.zipファイルとして保存します。
- 二番目の**エクスポート**ウィンドウが開きます。ログファイルを保存します。  
**注記：** **拡張済みログ**を選択した場合、すべてのデータを収集するまで、少し時間がかかることがあります。**拡張済みログ**を選択していない場合、基本ログファイルが保存されます。  
ログファイルの名前を入力し、**保存**をクリックします。



**エラーメールを送信：** プロジェクトでエラーが発生した際、自動構成でユーザーに警告メールを発信したい場合、このオプションを選択します。例えば、スキャン、検証、エクスポートはサービスまたはサーバーによって実行されます。

**バッチエラーを送信：** バッチでエラーが発生した際、同じユーザーに警告メールを発信したい場合、このオプションを選択します。

宛先フィールドに受信者を入力します。

ブラインドコピーで、CCフィールドに受信者を入力します。

ホスト名とポート番号を入力します。

IRIS Powerscan が送ろうとする電子メールの送信を断念する**タイムアウト**の時間を設定します。標準設定は、60 秒になっています。

必要ならば、**SSLを使用する**を選択し、セキュア・ソケット・レイヤーを使って暗号化します。

ユーザー名とパスワードを入力します。

入力したら、**テスト送信**をクリックしてテストメールを送信します。

**注記：** IRIS Powerscan Serverを使用する場合、同じ報告設定が、IRIS Powerscan Serverアプリケーション内で設定されている必要があります。

## XMailFetcher を IRIS Powerscan と併用する方法

### XMailFetcher のインストールと設定

**インストール前の注意事項：** XMailFetcher のインストールと設定を行うには、そのシステムの管理者の権限が必要です。

#### ステップ 1: XMailFetcher をインストールする

XMailFetcher をインストールするには、XMailFetcher.exe をダブルクリックします。

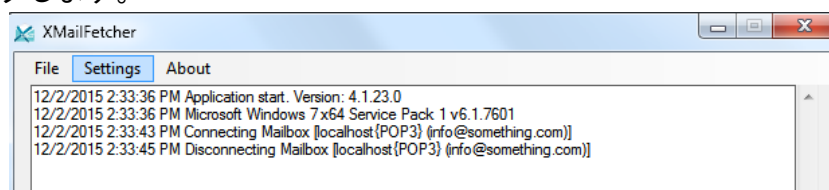
#### ステップ 2: XMailFetcher をアクティベーションする

XMailFetcherを起動します。アクティベーションするよう指示されます。ご自身の ID を、[register-DE@irisincorporate.com](mailto:register-DE@irisincorporate.com) に送ります。すると、ID と交換にアクティベーション・キーが送られて来ます。それを所定のフィールドに入力します。

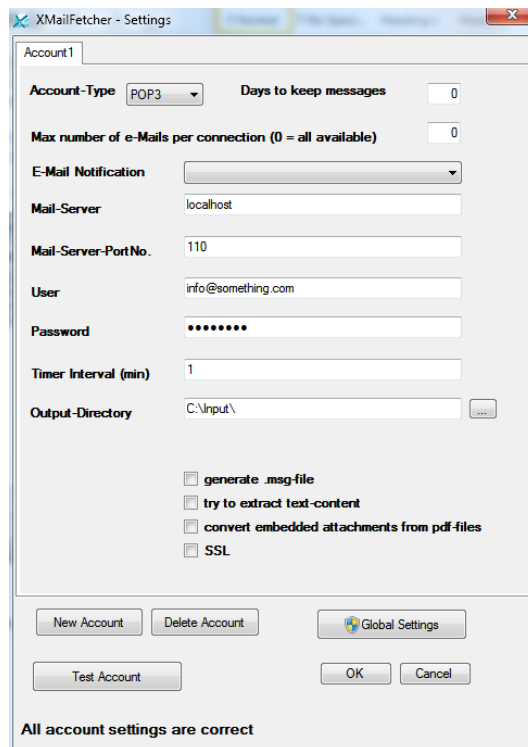
**重要：** アクティベーション・キーを入力するまで XMailFetcher のアプリケーションを閉じないでください。途中で終了すると、ID が変わってしまいます。

#### ステップ 3: XMailFetcher を設定する

設定をクリックします。



- ご自身のアカウントのタイプを**アカウントタイプ**のリストから選択します。
- 選んだアカウントタイプに応じて要求される入力項目について、全てのフィールドに書き込みます。
- **出力ディレクトリ**を入力します。  
これは、送信される電子メールのフォルダまでのディレクトリです。IRIS Powerscanで XMailFetcher をソースとして設定する時は、このフォルダを**入力フォルダ**として使用しなければなりません。
- すべての設定が正しければ、確認のメッセージが画面の最下部に表示されます。
- アカウントの接続を試験するには、**アカウントをテストする**をクリックします。

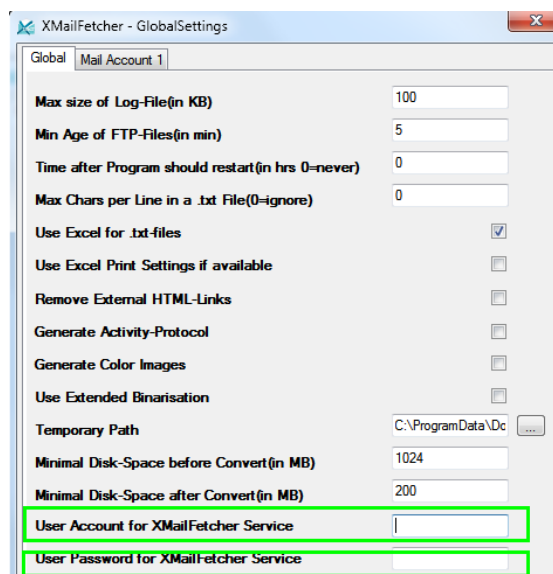


これから、XMailFetcher をサービスとして運用するための設定を行います。そのためには、少なくとも一つのアカウトを電子メールのフェッチ用に設定する必要があります。

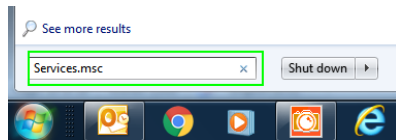
1. グローバル設定をクリックします。
2. ユーザーアカウントとパスワードを指示されたフィールドに入力します。  
アカウントをテストするのボタンが現れたら、これをクリックします。

このアカウントは、使用しているオペレーティングシステムの管理者の権限を必要とすることに留意してください。

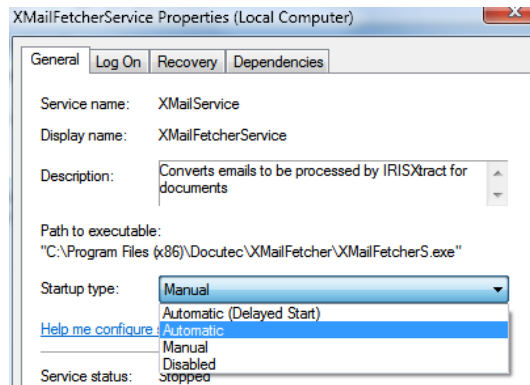
3. OK をクリックして、グローバル設定を終了します。



4. XMailFetcher のすべてのダイアログボックスを閉じます。
5. 次に、Windows の検索フィールドに **Services.msc** と入力します。



6. 表示されたリストを **XmailFetcherService** までスクロールします。
7. それを右クリックしたら、続いて、**プロパティ**をクリックします。
8. **起動タイプ**のリストから**自動**を選択します。
9. **適用**をクリックして、設定を適用します。



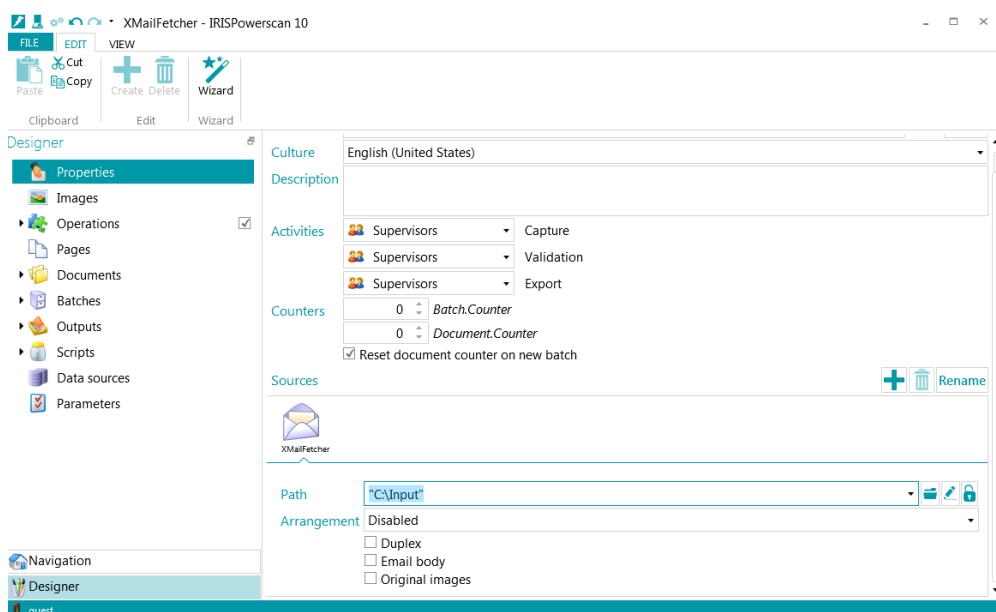
10. **開始**をクリックし、サービスを開始します。

設定に関する詳細は、XmailFetcher 総合ユーザーガイドをご覧ください。

## IRIS Powerscan 内の設定

XMailFetcher をソースとして追加するには、**デザイナー** > **プロパティ**にジャンプし、ソースのフィールドの横にあるプラスサインをクリックします。XMailFetcherを入力ソースとして選択します。

スキャン元からのパスを選択します。これは、XMailFetcher のアプリケーションで設定した **出力ディレクトリのフォルダ**でなければなりません。



## スキャン

IRIS Powerscan に戻って、XMailFetcher の設定済みプロジェクトの中からのスキャンを行います。電子メールが、IRIS Powerscan の中に送られます。

**ヒント** : XMailFetcher 内の処理を確認するには、アプリケーションを起動します。メインウィンドウでアクティビティをチェックします。一通の電子メールが変換されると、次のようなアクティビティのメッセージが表示されます : **Converting MailBody to Multipage TIFF done.**

## QRコードを解読する方法

ここでは、スクリプトによる QR コードの解読方法を説明するために、一つの例を採用します。

次のような画像を IRIS Powerscan のあるプロジェクトにインポートします。

**Hubert de Brye sprl**  
entreprise d'aménagements extérieurs

---

Rue Abbessé, 80  
1457 NIL-SAINTE-VINCENT  
Tél: 010-65.79.21  
Fax: 010-65.78.72  
E-mail: hubert.de.brye@skynet.be

SAIRIS  
Rue du Bosquet 10  
B - 1348 LOUVAIN-LA-NEUVE  
TVA n° BE-430.824.708

**FACTURE n° 12650 du 31/12/2012**

Description détail devis	Unité/Taille	Quantité	PU €	Total HT €	TVA
Décembre 2012					
Travaux de Salage et de déneigement					
03/12 Salage	heure	1,00	38,75	38,75	
1/12 Salage	heure	1,00	38,75	38,75	
07/12					
Déneigement	heure	1,00	62,00	62,00	
Salage	heure	1,00	38,75	38,75	

Page 1  
Total HT €    TVA

---

Base 0%	Base 6%	Base 12%	Base 21%	TVA	Total
172,25					178,25 €

TVA à acquitter par le cocontractant (A.R. 1, Article 20)    Echéance : Comptant

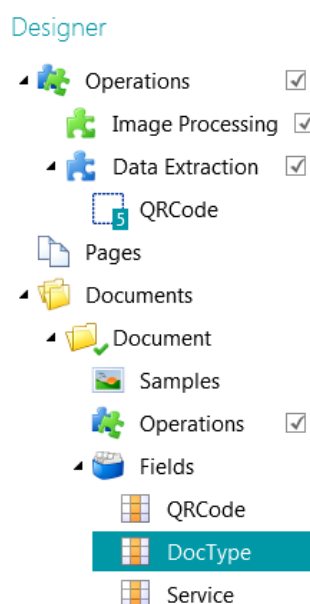
Hubert de Brye sprl - 1457 Nil-Sainte-Vincent - Belgique - TVA n° BE-430.824.708  
Rue du Bosquet 10 - 1348 Louvain-la-Neuve - Belgique  
Tél: 010-65.79.21 - Fax: 010-65.78.72 - E-mail: hubert.de.brye@skynet.be

この画像は、“DocType=Inv;Service=03” という文書タイプとサービス内容を示す QR コードを持っています。



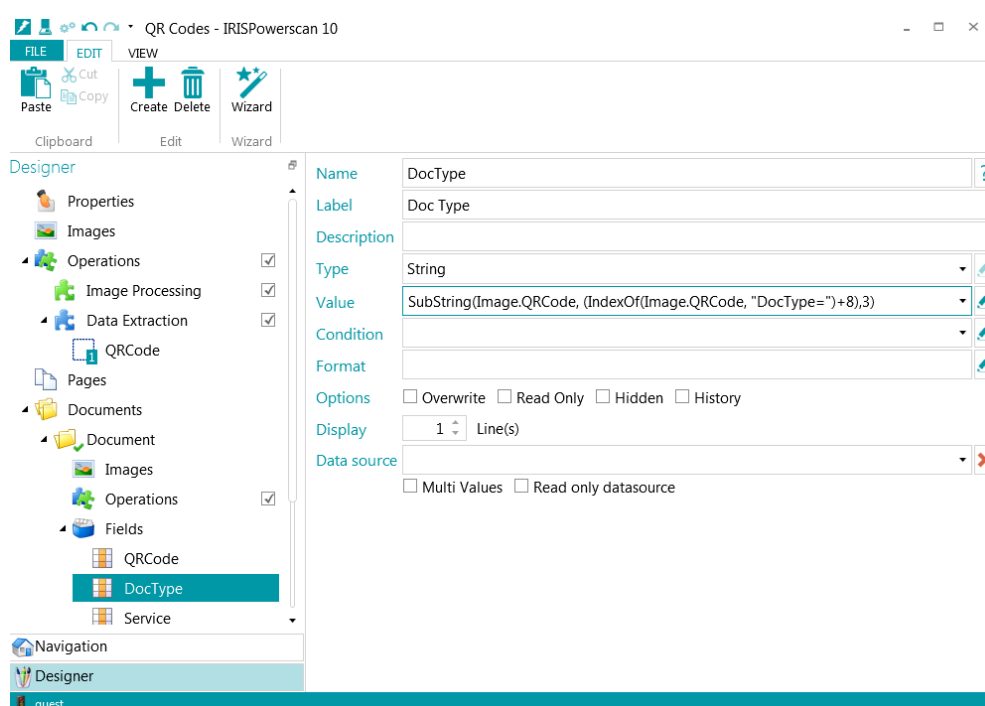
- QR コードのデータ抽出ゾーンを作成します。
  - デザイナー > 画像 にジャンプします。上図を追加します。
  - デザイナーエクスプローラで、操作 > データ抽出をクリックします。
  - QR コードの周りに枠を描き、タイプにバーコードを選択して、次へをクリックします。
  - ゾーンにQRCodeという名前を付け、完了をクリックします。

- 次に、標準のドキュメントにジャンプして、三つのインデックスフィールド、QRCode、DocType、および Service を作成します。



- QRCode の値フィールドに **Image.QRCode** を入力します。
- DocType の値フィールドには、次のスクリプトを入力します：  
`SubString(Image.QRCode, (IndexOf(Image.QRCode, "DocType=")+8), 3)`

このスクリプトは、DocTypeの値が、QR コードの “DocType=” のラベルに続く3文字のサブstringで取り出した文字列から得られることを意味します。

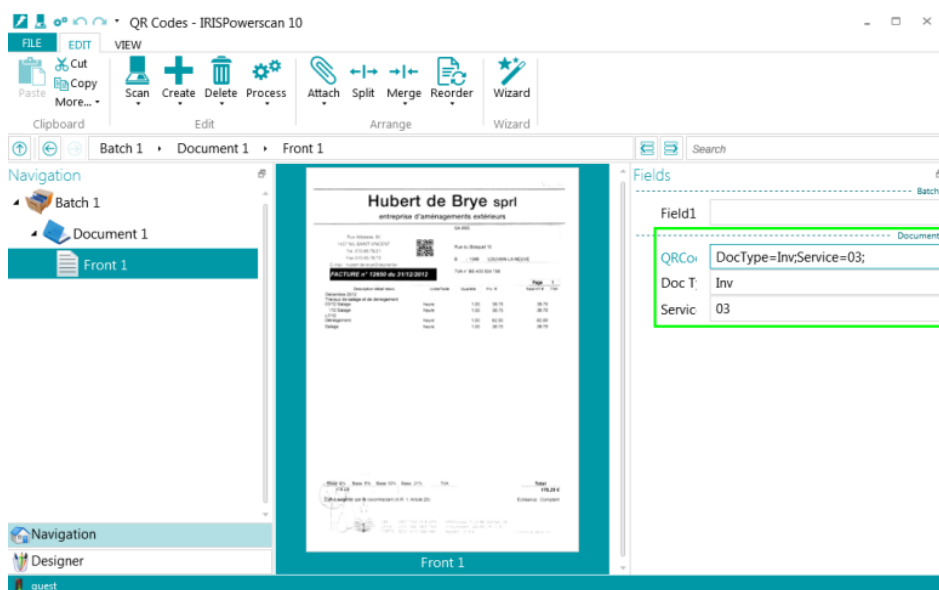


- Service の値フィールドには、次のスクリプトを入力します：  
`SubString(Image.QRCode, (IndexOf(Image.QRCode, "Service=")+8), 2)`

このスクリプトは、Service の値が、QR コードの “Service=” のラベルに続く2文字のサブストリングで取り出した文字列から得られることを意味します。

ヒント： ペンシルアイコンをクリックして表現式エディタを開き、このスクリプトが例の画像上でどのように機能しているかを確認します。

2. ナビゲーションモードに戻り、再スキャンをクリックします。  
その結果、文書インデックスフィールドの DocType と Service には、QR コードから抽出された 「Inv」と 「03」という値が、それぞれ入っているのが分かります。



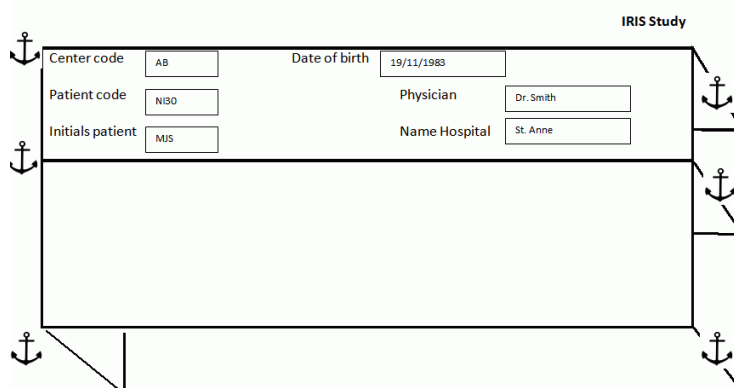
## アンカー一点の検出の使用法

アンカー一点の検出で、たとえ、スキャンした画像にずれが発生しても、認識ゾーンが正しく配置されていることを確認でき、正しい配置ゆえに認識処理を正しく実行することが可能です。

ある意味で、アンカーポイントの役目は、船の錨と同じで、あるものを所定の位置に固定することです。

但し、IRIS Powerscan では、画像のずれは修正されますが、画像自体の歪は修正できないので、ご注意ください。

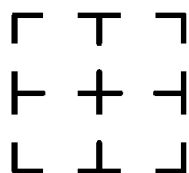
**重要：** IRIS Powerscanでは、チェックマークゾーンおよびアンカー形状を認識するために白黒画像が必要となります。カラー画像をスキャンする場合、**画像処理操作として2値化操作を必ず追加してください。**



### 厳密に言うと、アンカーポイントとは？

アンカーポイントは、**2本の直線が交差する点**です。下図では、次のように、多くの点がアンカーポイントとなる可能性があります。

- 左上のコーナー
- 右上のコーナー
- 左下のコーナー
- 右下のコーナー
- 十字
- 下端
- 左端
- 上端
- 右端

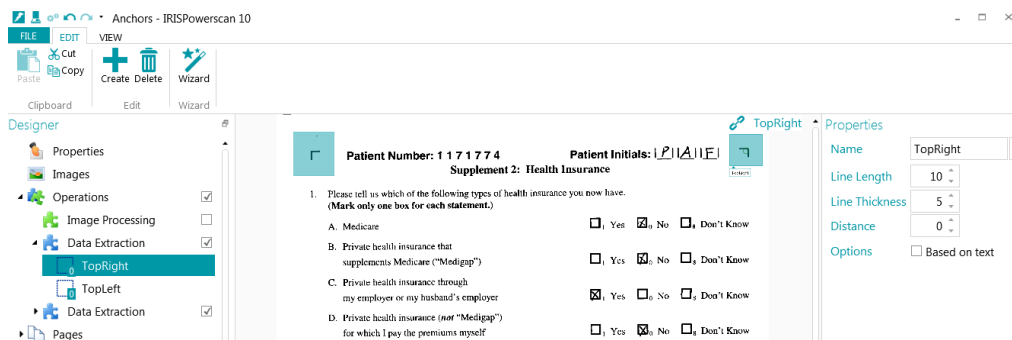


一つの画像には少なくとも一つ、理想としては4つ以上のアンカーポイントが必要です。

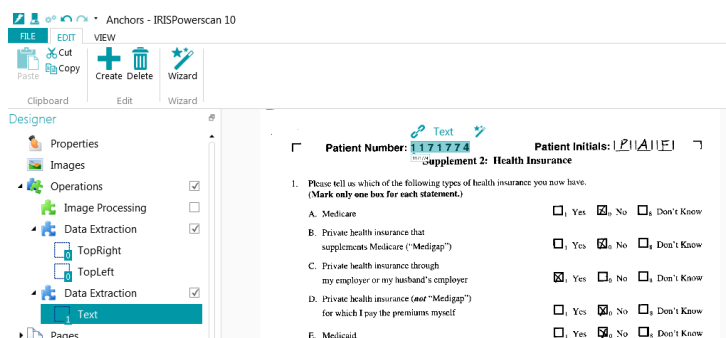
**注記：** 黒の正方形は、アンカー形状としてサポートされていません。

## アンカー点の検出がどのように機能するか例

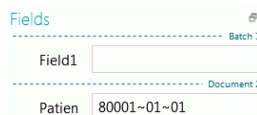
- IRIS Powerscan で、**ファイル > 開く**の順にクリックします。
- **アンカープロジェクト**をダブルクリックで開きます。
- 画面の左下隅の**デザイナータブ**をクリックし、**デザイナーモード**に切り替えます。
- **デザイナーツリー**を**操作 > データ抽出**と展開します。
- 二つのアンカーポイントが既に定義されているのが分かります。



- 第二のデータ抽出設定では、一つのテキスト検出ゾーンが定義されています。アンカーポイントが無い場合、もしも、ページのずれが起こったら、このテキスト検出ゾーンは、文字を正しく認識しないでしょう。



- これをテストするため、第一の**データ抽出設定**がアンカーポイントを含むかチェックをしないままとします。
- **ナビゲーションモード**に切り替えます。この時、プロジェクトを保存するよう求められます。保存する場合は、**はい**をクリックします。
- 次に、**スキャン**をクリックします。  
スキャンが完了したら、読み込んだ各ドキュメントをクリックして、**Patient ID**のインデックスフィールドをチェックします。  
殆どのドキュメントで、このインデックスフィールドが正しく認識されていないことが分かるでしょう。これは、サンプル画像がずれているためです。



- **デザイナーモード**に戻り、もう一度、第一の**データ抽出設定**を選択します。
- 次に、**ナビゲーションモード**に戻って、スキャンしたバッチを削除し、**スキャン**を再度クリックします。

今度は、Patient ID のインデックスフィールドが、正しく認識されているのが分かるでしょう。

Fields	
Field1	
----- Document 2	
Patient	1173423

## IRIS Powerscan でアンカーポイントを作成する方法

**事前の注意事項：** このセクションでは、アンカーポイントとして使用可能なオブジェクトを含む画像、または用紙が、既に存在する前提で説明を進めます。

もし、使用可能なものがなければ、**Document Generator** ツールを使って、アンカーポイントドキュメントを作成できます。このツールは、**すべてのプログラム > IRIS Powerscan 10 > ツール > Document Generator** にあります。

### 画像処理の要件

アンカーポイントの検出は、2値化された（白黒）画像に適用されます。カラー画像を使用している場合は、**画像処理操作**として**2値化処理**を施してください。

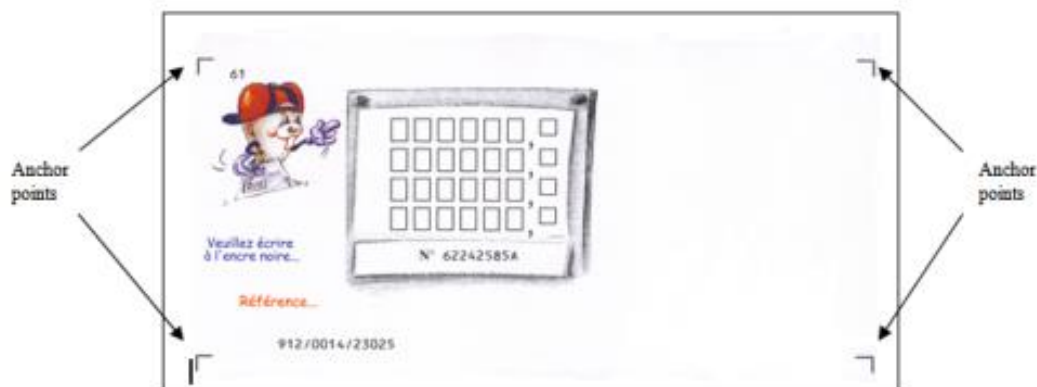
2値化処理を実施するには、**ウィザード > 画像処理操作を追加する > 2値化**を順にクリックします。この操作を行わなくても、標準の2値化処理が適用されます。

これからアンカーポイントのデザインを重ねようとする画像は、曲がりのない、または傾き補正された**完全な**ものでなければなりません。

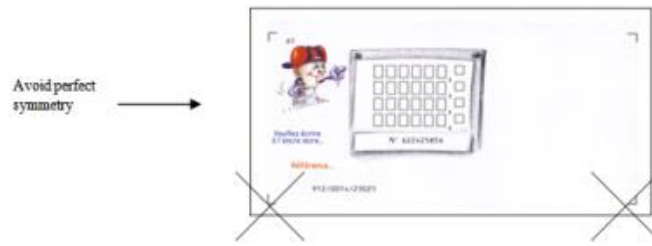
斜めにスキャンされた画像が曲がったままにならないよう、**画像処理操作**として**傾き補正**を適用します。

### 推奨される配置

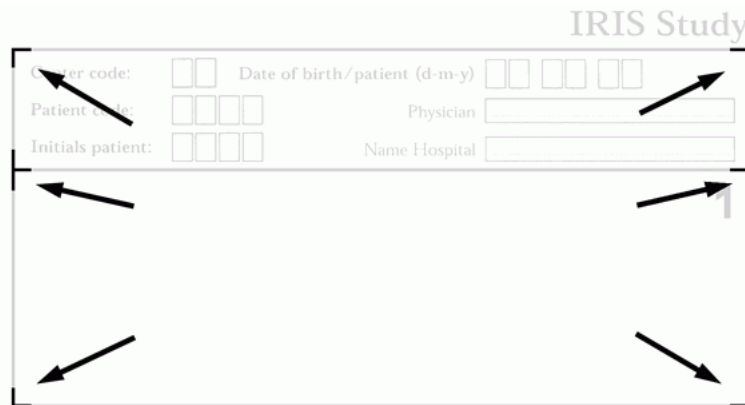
1. アンカーポイントは、**画像全体**にわたって均一に分散するようにします。アンカーポイントが同じエリアに集中してしまうと、システムは、正確に情報のある場所を特定できなくなってしまいます。



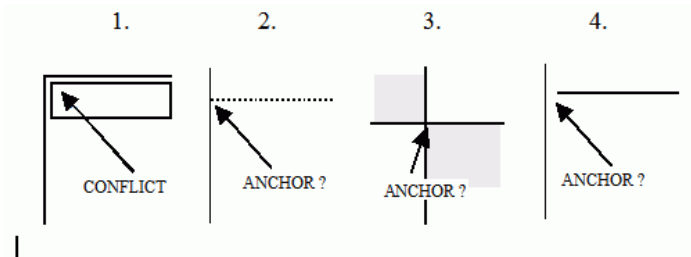
2. **完全な対称性は避けるべきです。** アンカーポイントが完全に前後左右対称な位置にあるとドキュメントの再配向ができなくなる場合があります。



3. 画像のコンテンツに表や升目を形成しているものがある場合は、そしてこれらの直線の太さが2画素以上あれば、直線の交点をアンカーポイントとして利用することができます。

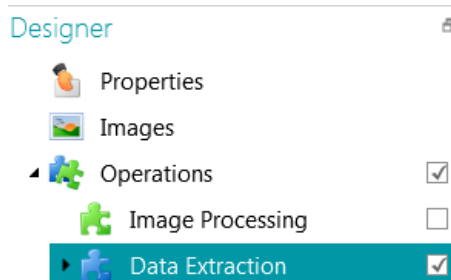


4. システムがアンカーポイントと見做す可能性のある角の近くにアンカーポイントを置いてはいけません。
5. アンカーポイントに点線を利用することはできません。
6. 灰色の陰影のあるエリアにアンカーポイントを配置しないでください。
7. アンカーポイントとして採用する二本の直線は、確実に接し、交点を形成していることを確認してください。



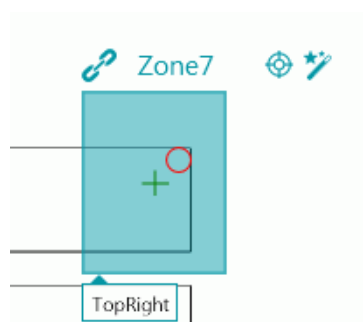
### IRISPowerscan でアンカーポイントを作成する

- デザイナーツリーでアンカーポイントを画像に追加していきます。
- 操作を展開し、データ抽出を選択します。



- アンカーポイントとして使いたいエリアを決めたら、その周りを囲むように枠を描きます。
- アンカーポイント（形状）を選択し、次へをクリックします。
- 以下のオプションの設定を行います。
  - アンカー形状ゾーンの名前を決めて、入力します。
  - 線の長さ： 考慮すべき直線の最短の長さ
  - 線の太さ： 考慮すべき直線の最大の太さ
  - 距離： 画像の境界線からの最小距離（画像の境界線をアンカーと間違えて検出することを避けるため）
  - 形状： 期待するアンカーポイントの形状を選択します。
- 終わったら、完了をクリックします。
- これで、アンカー形状ゾーンが、画像上に作成されました。
- ターゲットアイコン（🎯）をクリックし、十字を円の中央に移動します。こうすることで、データ抽出ゾーンを検出するアンカーの中央に合わせます。

注記： ここでは、ウィザード（🔮）は使用しません。



注記： 赤い丸は、アンカーが検出されたことを示しています。緑の十字は、データ抽出ゾーンの中心を示しています。

- 以上のステップを、他のアンカーポイントについても繰り返し実施します。

#### 処理中に何が起きているか？

データ抽出処理の過程で、IRIS Powerscan は、データ抽出ゾーンの中で指示された形状のアンカーを探します。

アンカーが見つかる、検出された各アンカーについて、実際の位置とデザイン時点での設定位置の間のオフセット量を計算します。そして、その中からオフセット量の平均値を算出します。この平均値を使って、他のすべての抽出データをシフトして位置補正を行います。

## チェックマーク検出の使用方法

IRIS Powerscan では、チェックマークの検出ゾーンを作成できます。このゾーンは、**チェック有り** (1)、**チェック無し** (2)、または **取り消し** (4) の3種類の値をとることができます。

表現式を使えば、これらのチェックマークゾーンの値をインデックスフィールドに書き込むことが可能です。その方法をこれから説明します。

**重要：** IRIS Powerscanでは、チェックマークゾーンおよびアンカー形状を認識するために白黒画像が必要となります。カラー画像をスキャンする場合、画像処理操作として2値化操作を必ず追加してください。

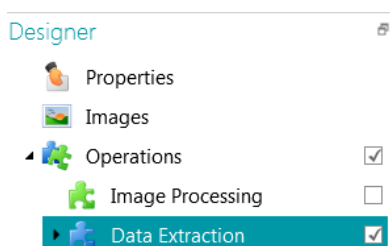
### IRIS Powerscan でチェックマークゾーンを作成する

- 新しいプロジェクトを作成し、**デザイナーモード**に切り替えます。
- **画像**を右クリックし、使いたいチェックマークの入っているサンプル画像を追加します。

**重要：** これからスキャンするページのチェックマークの位置は、このサンプル画像上のチェックマークの位置と完全に一致しなければなりません。位置ずれがあると認識処理は機能しません。

スキャン時に多少でも斜行が発生するようなら、**アンカー一点の検出**をチェックマークの検出と組み合わせて活用することを推奨します。

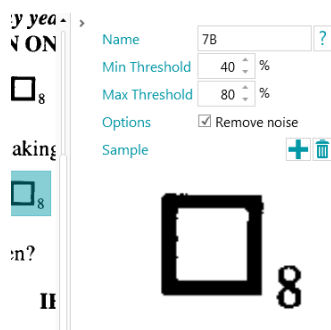
- **操作**を展開し、**データ抽出**を選択します。



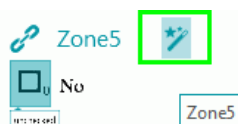
- チェックマークとして使いたいエリアを決めたら、その周りを囲むように枠を描きます。
- **チェックマーク形状**を選択し、**次へ**をクリックします。
- 以下の**オプション**の設定を行います。
  - チェックマークゾーンの**名前**を決めて、入力します。
  - **最小閾値**： この値は、ゾーンがチェックマークのゾーンであると判断されるために、ゾーン内部の塗り潰されていなければならない面積の百分率比です。標準設定の最小閾値は、30 % です。
  - **最大閾値**： もし、ゾーン内の最大閾値以上の面積比が塗り潰されていたら、そのゾーンは、チェックされた（チェック有り）ではなく、線を引いて取り消されたと判断されます。



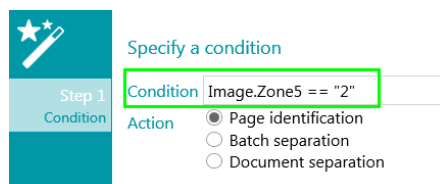
- **ノイズを減少**： **ノイズを減少**を選択して、IRIS Powerscan にノイズとなっている画素をゾーンから除去させます。
- **サンプル**： 認識精度を高めるために、サンプル画像の追加を推奨します。サンプルがないと、IRIS Powerscan は、データ抽出ゾーン全体を調べます。サンプルがあれば、考慮すべき画素は、実際のチェックマークゾーン内部にある画素だけに限定できます（チェックマークも含む）。



- チェックマークゾーンにあるウィザードアイコンをクリックします。



- チェックマークゾーンの値を判定します。  
チェックマークゾーンが取り得る値は、1（チェック有り）、2（チェック無し）、または 4（取り消し）です。



- 以上のステップを使いたいチェックマークゾーンの全てについて繰り返します。

### チェックマークゾーンの値を基にインデックスフィールドに書き込む

必要なチェックマークゾーンの作成と値の関連付けが完了したら、これらチェックマークゾーンの値は、インデックスフィールドの記入に使用できます。

その方法を、IRIS Powerscan で**チェックマークのデモ用プロジェクト**を使って解説します。

- IRIS Powerscan で、**ファイル > 開く**の順にクリックします。
- **チェックマーク**をダブルクリックし、プロジェクトを開きます。
- **スキャン**をクリックして、デモ用画像をスキャンします。
- 文書インデックスフィールドが書き込まれているのが分かります。



- デザイナーモードに切り替えて、ページ > 0101 > 操作 > データ抽出と展開します。
- 質問 4C に対しては、二つのチェックマークゾーンが作成されています。そして、これらのチェックマークゾーンの値を使って、4C のインデックスフィールドの値が決定されています（上図参照）。

4. Since the age of 45, have you broken any of the following bones?

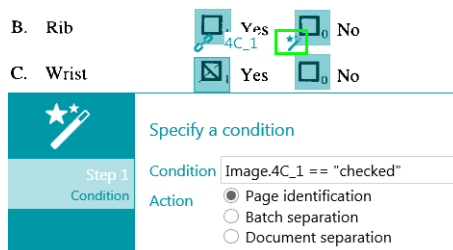
A. Hip  Yes  No

B. Rib  Yes  No

C. Wrist  Yes  No

D. Spine (backbone)  Yes  No

- チェックマークゾーンを一つ選択し、ウィザードアイコンをクリックしてそのゾーンの値を確認します。  
ツールチップとして、はいが「チェック有り」に、そしていいえが「チェック無し」に対応しているのが分かります。



- これら二つのチェックマークゾーンの値は、4Cのインデックスフィールドの値を決定する表現式で使われています。
- 実際にこれを確認するには、ドキュメント > 0101 > フィールド > 4Cの順に展開します。  
表現式を調べます。  
表現式から、チェックマークゾーン、Image. 4C\_1 がチェック有り（1）ならば、値は「はい」、さもなければ、値は「いいえ」となり、チェックマークゾーン、Image. 4C\_2 についても同様の判定でチェック有り（1）となっています。

注記： チェックマークゾーンが取り得る値は、チェック有り（1）、チェック無し（2）、および、取り消し（4）のいずれかです。

The screenshot shows a software interface with a tree view on the left and a configuration panel on the right. The tree view includes 'Operations', 'Pages', 'Documents', '0101', 'Images', 'Operations', and 'Fields'. Under 'Fields', there are sub-items 'Race', '3', '4A', '4B', and '4C'. The '4C' item is selected. The configuration panel for '4C' has the following settings:

- Type: String
- Value: `?(Equals(Image.4C_1, '1', true), 'Yes', '') + ?(Equals(Image.4C_2, '1', true), 'No', '')`
- Condition: (empty)
- Format: (empty)
- Options:  Overwrite,  Read Only,  Hidden,  History
- Display: 1 Line(s)
- Data source: (empty)
- Multi Values,  Read only datasource

勿論、もっと手の込んだ表現式を使うことも可能です。例えば、人種のフィールドの値の表現式をチェックしてみてください。

## Debookletting の使用方法

Debookletting 機能は、本の高速スキャンを実現します。本をスキャンする際、一度に2ページずつスキャンする代わりに、本を束ねているホッチキスを外して、ページの束を丸ごと両面スキャナに読み込ませます。その時**並べ替え**操作を使えば、スキャンしたページを正しい順番に並び替えることができます。

ページの向きは縦横どちらの方向でも構いません。

### 注記：

Debookletting 機能は、ドキュメントレベルでのみ有効です。異なるドキュメントおよびバッチ間でページを並べ替えることはできません。

Debookletting 機能は、**偶数**のページカウントでのみ有効です。

これが、**並べ替え**操作を利用できる唯一の使用事例です。ただし、メインツールバーにある**編集**タブの**並べ替え**ツールには、その他の機能も備わっています。詳細については、ユーザーガイドの対応するセクションを参照してください。

### 要件：

用紙サイズは、A4 または A3 でなければなりません。

使用するスキャナは、**両面モード**を備えていなければなりません。

注意：実際のスキャナーを使用する場合、Debookletting 機能の片面モードは無効となるため

**使用しないでください**。フォルダからスキャンする場合、両面モードは不要です。

ソース設定の**配置オプション**には、必ず**横に分離**を選択してください。

Debookletting は、**並べ替え**操作により自動的に実行するか、或いは**並べ替え**ツールを使って手動で行うこともできます。

### 自動並び替え

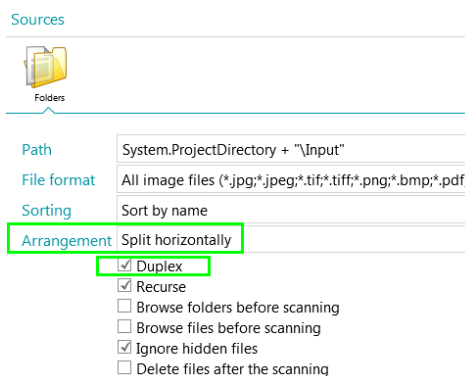
- プロジェクトを開き、**ウィザード**をクリックします。
- **操作を追加する** > **並べ替え**を選択します。
- デザイナーモードに切り替えて、**操作** > **並べ替え**と展開します。
- **自動**、**モード**:の順に選択します。

**重要**：自動モードでは、並べ替えはドキュメントの最後でのみ行われます。これは区切りを使用しているプロジェクトに影響を与えます。このようなプロジェクトでは、区切りがページ配置後の最初の画像となる必要があります。

- **カバーが最初**：カバーページを最初にスキャナに読み込ませる場合。
- **カバーが最後**：カバーページを最後にスキャナに読み込ませる場合。



- スキャンしたい本のホッチキスを外し、中のシートをばらばらの状態にします。  
**重要：** 但し、シートは正しい順序のままとし、混在しないように気を付けてください。もし、シートの順序が混乱してしまったら、OCR準拠の並び替え処理を行う必要があります（下記参照）。
- デザイナーモードでプロパティをクリックします。
- ここで、使用する入力ソースの選択を行います。
  - スキャナの両面モードが起動していることを確認してください。
  - 配置として横に分離を選択します。



#### ソースとしてフォルダを使った例

- ドキュメントをスキャンします。読み込んだページは、正しく並び替えられているはずですが。

**重要：** スキャナがテキストを読み込む走査方向に注意してください。場合によっては、IRISPowerScan で読み込んだ画像に回転操作を適用する必要があるかもしれません。

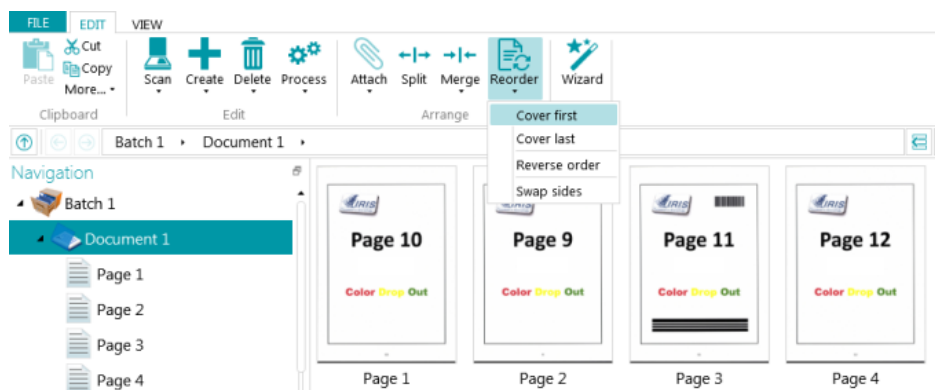
#### 手動並び替え

- スキャンしたい本のホッチキスを外し、中のシートをばらばらの状態にします。  
**重要：** 但し、シートは正しい順序のままとし、混在しないように気を付けてください。もし、シートの順序が混乱してしまったら、OCR準拠の並び替え処理を行う必要があります（下記参照）。
- デザイナーモードでプロパティをクリックします。
- ここで、使用する入力ソースの選択を行います。
  - スキャナの両面モードが起動していることを確認してください。
  - 配置として横に分離を選択します。

- ドキュメントをスキャンします。

**重要：** スキャナがテキストを読み込む走査方向に注意してください。場合によっては、IRISPower scan で読み込んだ画像に回転操作を適用する必要があるかもしれません。

- ナビゲーションモードで今作成されたばかりのドキュメントを選択します。
- 並べ替えの横にある下向き矢印をクリックし、ページをどのような順番でスキャンしたかに応じて、カバーが最初、またはカバーが最後のいずれかを選びます。



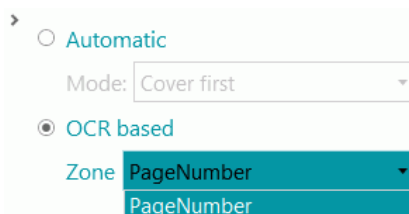
**ヒント：** 万一、間違った方を選んでしまったら、Ctrl+Z のショートカットを使って、並び替えを取り消します。

### OCR 準拠の並び替え

ページが無秩序に混在してしまっても、ページ番号を基に OCR 準拠の並び替えを使って元の順序に並び替えることができます。

**重要：** その他の並び替えモードに関しても、同じ要件が適用されます。

- ページ番号の付いている[サンプルページを追加します。](#)
- ページ番号の周りに[データ抽出ゾーンを作成します。](#)
- ウィザード > 操作を追加する > 並び替えをクリックします。
- デザイナーモードに切り替えて、操作 > 並び替えと展開します。
- OCR 準拠を選択したら、続いて、ドロップダウンリストから今作成したページ番号のゾーンを選びます。

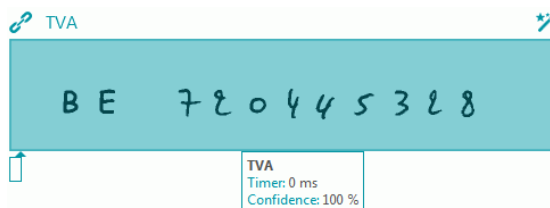


- ページを両面モードでスキャンします。  
ページ番号が正しく認識されていれば、ページは、正しい順序に並び替えられているはずでず。

**重要：** バッチでスキャンするページの番号は、必ず偶数にしてください。奇数のページ番号が残ると正しく並び替えできません。

## インデックスフィールドの正確度レベルを使用する

IRIS Powerscan は、常に、データ抽出ゾーンの正確度レベルを計算しています。正確度レベルは、データ抽出ゾーンのツールチップに表示されます。

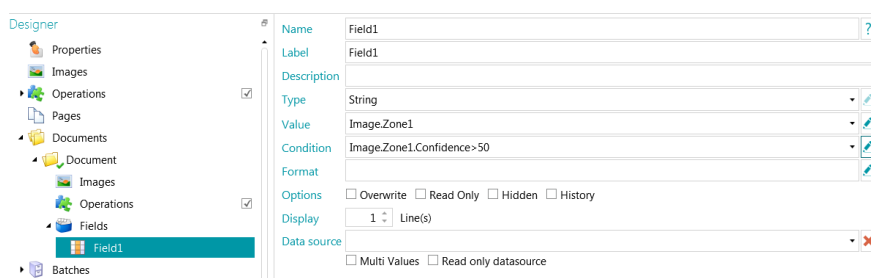


データ抽出ゾーンがインデックスフィールドにリンクされている場合、**正確度**の条件をインデックスフィールドに適用することができます。これは、データ抽出ゾーンの認識精度という正確度が所定のレベルより低ければ、そのゾーンとリンクするインデックスフィールドには不正確というフラグが立てられることを意味しています。

データ抽出ゾーンは、テキスト、手書き、またはバーコードタイプでなければならぬ点にご注意下さい。

インデックスフィールドで正確度レベルを使うには、

- テキスト、手書き、またはバーコードタイプのデータ抽出ゾーンを作成します。例えば、これを Zone1 とします。
- それを標準文書タイプの標準インデックスフィールド、Field1 にリンクします。具体的には、**値**として **Image.Zone1** を入力します。
- 次に、**正確度の条件**を入力します。  
本書の例では、**Image.Zone1.Confidence>50** となっています。  
以上の設定により、もし、データ抽出ゾーンの値、**Image.Zone1** の正確度レベルが 50 を下回るならば、このインデックスフィールドには、不正確というフラグが立てられることになります。  
正確度レベルの値は、1（非常に低い正確度）と100（非常に高い正確度）の間の整数でなければなりません。



- 不正確なインデックスフィールドを含むドキュメントとバッチも、不正確としてフラグを立てられ、検証を必要とします。
- 検証を実施し、必要ならば、結果を変更します。

しかしながら、結果を修正しても、インデックスフィールドの色は変わりません。

## 注記：

正確度レベルは、ページ、ドキュメント、およびバッチのレベルにも適用できます。

ページの正確度レベルは、変数内に保存されます。

- Page. Confidence
- *<Page. Type>. Confidence*

ドキュメントの正確度レベルは、変数内に保存されます。

- Document. Confidence
- *<Document. Type>. Confidence*

バッチの正確度レベルは、変数内に保存されます。

- Batch. Confidence
- *<Batch. Type>. Confidence*

## 不明な変数を持つ表現式が処理されないようにする方法

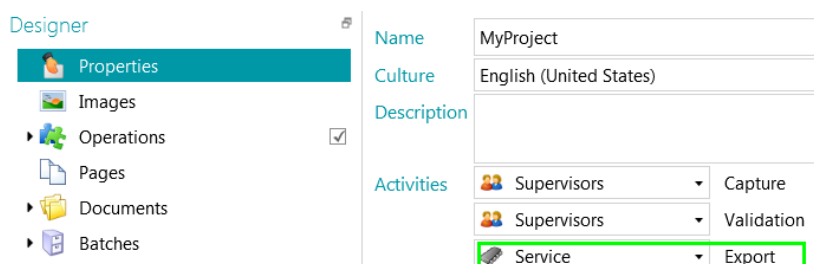
IRIS Powerscan では、不明な変数は、空の文字列で置き換えられます。例えば、変数、Page. Index が不明、若しくは表現式、「Page ( “ + Page. Index + ”)」で見つからない場合、表現式は、「ページ()」として評価されます」。

不明な変数を持つ表現式が評価となることを避けるには、表現式の前に「？」を置いて、さらに表現式を括弧で括弧するようにしてください。

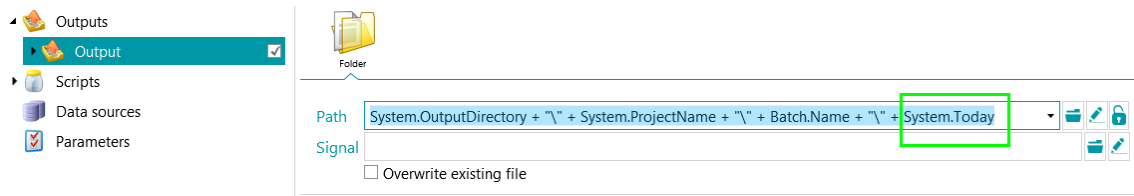
例えば、?“Page ( “ + Page. Index + ”)”といった具合です。

## IRIS Powerscan、使用している Windows システムアカウント、および Windows ユーザーアカウント間で日付の書式を同期する方法

サービスによりエクスポートが処理され、日付が出力パスに追加される（変数の System. To day または System. Now を使用）プロジェクトでは、使用している Windows システムアカウントのカルチャが Windows ユーザーアカウントの言語に対応していない場合、問題が発生することがあります。カルチャの日付の書式は、dd/mm/yyyy または mm/dd/yyyy となります。



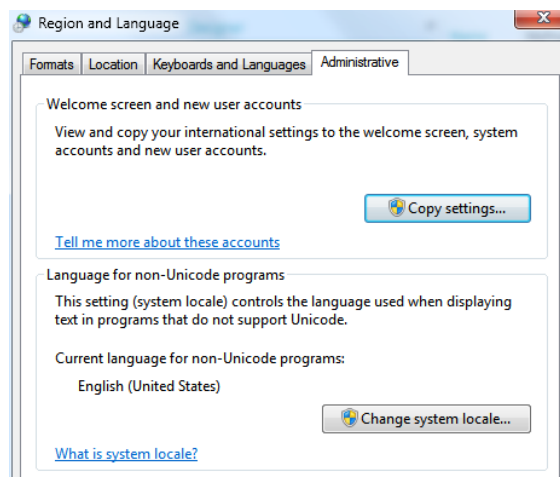
サービスにより処理されるエクスポート



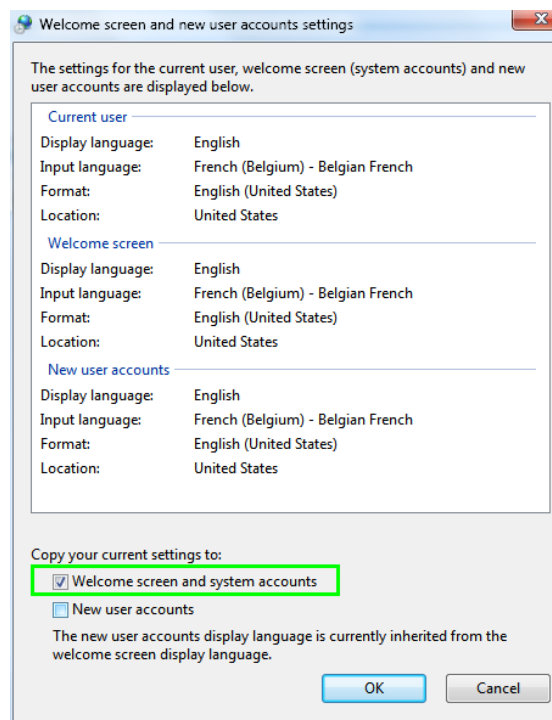
出カパスに追加される日付

両方のカルチャを同期する：

- コントロールパネル > 地域と言語 > 設定にジャンプします。
- コピー設定をクリックします。



- 表示されるウィンドウで、ウェルカム画面とシステムアカウントを選択します。
- OK をクリックして、設定内容を確認します。



## リセットコードの取得方法

専門的なコネクタを持つIRIS Powerscanバージョンを入手している場合、IRIS Powerscanのアクティベーション後に、選択したコネクタを選ぶよう指示されます。

コネクタの選択で作業は完了します。誤って、間違ったコネクタを選択した場合、リセットコードを取得する必要があります。

そのための手順は以下の通りです。

- ファイル > 情報 > 機能の順にクリックします。
- 右下隅にあるクリップボードにコピーをクリックします。
- この情報をメールに張り付けて、[activation@irisincorporate.com](mailto:activation@irisincorporate.com)宛てに送信します。
- メール本文に、リセットコードが必要である旨を記入してください。
- リセットコードを受け取ったら、ファイル > 情報 > 機能 にジャンプし、アクティベーションをクリックします。
- アクティベーション・コードフィールドにリセットコードを入力し、アクティベーションするをクリックします。
- 指示があったら、アプリケーションを再起動します。
- 次回、IRIS Powerscanが起動すると、コネクタを選択するよう再度指示されます。
- 今回は、必ず正しいコネクタをお選びください。

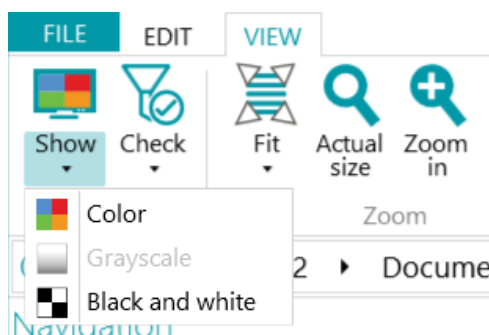
## 画像フィルタリングの適用方法

IRIS Powerscanに複数のストリームをスキャンする場合、画像ごとに表示させる必要があるストリームとエクスポートさせる必要があるストリームを選択できます。

### 仕組みの例

お手元の白黒ストリームとカラーストリーム両方の画像を、IRIS Powerscanにスキャンします。ページ2を除き、すべてのページにカラーストリームを表示し、チェック済みの白黒画像だけをエクスポートしたいとします。

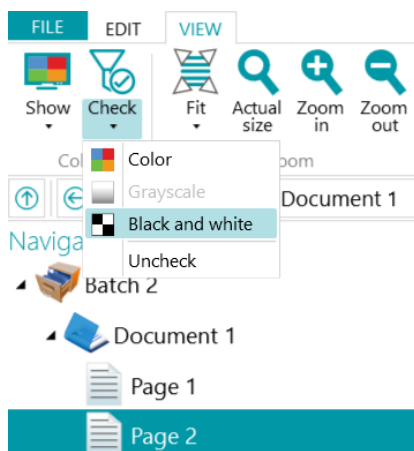
- 複数のストリームの画像を、IRIS Powerscanにスキャンします。
- [表示] タブをクリックします。
- [表示] の下にある下向き矢印をクリックして、[カラー] と [白黒] が利用可能であることを確かめます。



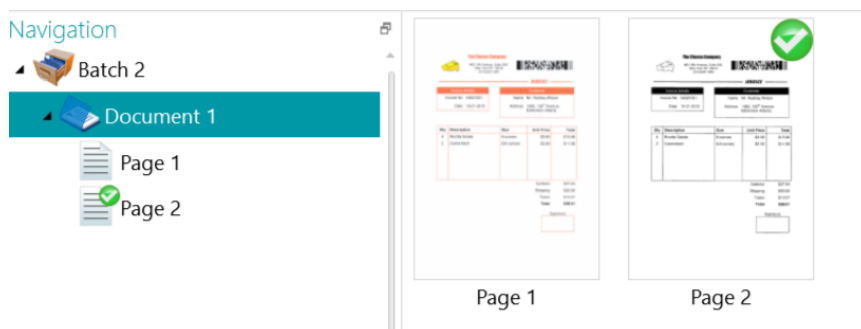
- [カラー] を選択します。  
お手元の画像のカラーストリームが表示されます。
- 白黒ストリームを表示させたいページを選択します。ここでは、ページ2とします。

- [チェック] の下にある下向き矢印をクリックして、[白黒] を選択します。

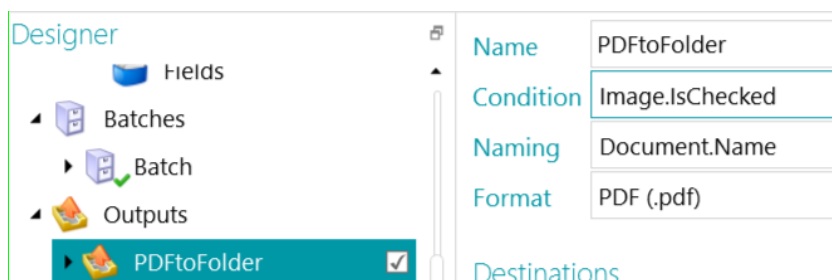
注記： 画像を右クリックして、[チェック] にポイントを合わせ、選択した画像で必要とされるストリームを選択することもできます。



- ここで紹介する例では、ページ2にチェックマークが入り、ページ2が白黒で表示されます。



- 出力をフィルタするには、デザイナーモードに切り替え、使用する出力タイプを展開します。
- 条件として、**Image.IsChecked** を入力します。  
ここでは、チェックされた画像だけがエクスポートされます。



- [プロセス] をクリックします。  
ページ2だけが、設定された出力先にエクスポートされます。

もちろん、他の条件も使用可能です。例えば、**Image.IsBest**です。この条件は、対応する画像/ストリームにチェックが入っており、その特定ページにおいて、対応する画像/ストリームの1ピクセルごとのビット数が一番高い場合、真と評価されます。または、**Image.IsVisible**を使用して、表示可能な（表示されている）画像だけをエクスポートします。